



東三河の傳説物語

乙部静夫著

1



0054709-000

特 229-110

東三河の伝説

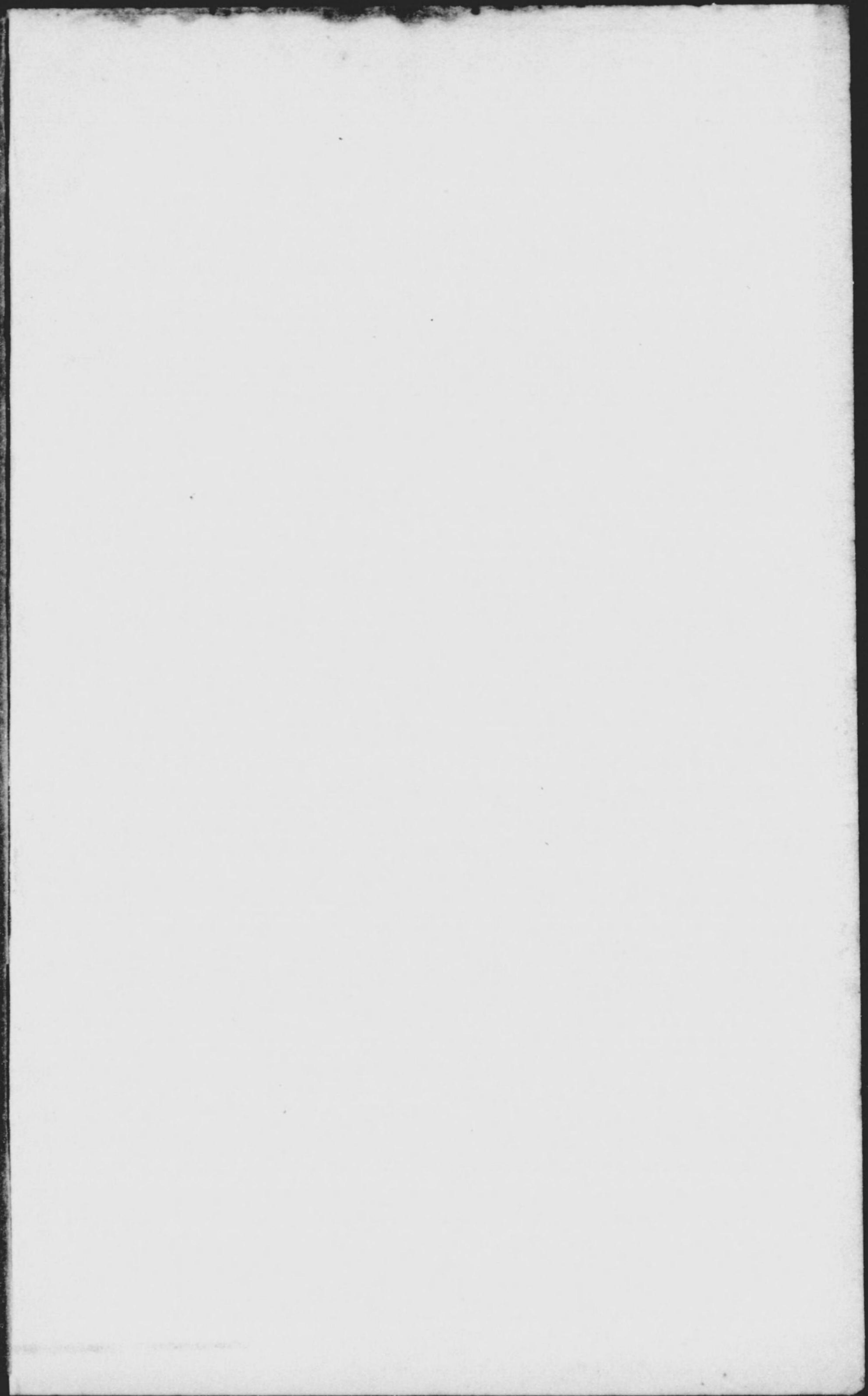
乙部静夫・著

東三河の伝説刊行会

昭和9

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権第67条の規定に基づき、平成12年3月
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの



特229
110



河の傳説



序

此の約半数はかつて名古屋新聞紙上へ連載したものの、その後蒐集調査した分を補足し、共に再吟味してこれへ輯録した。文字の示す通りこれは多く口碑に残る傳説である。しかし全然跡方のないものや、史料に屬するものはなるべくオミットする事にした。

本書上梓にあたり題字（扉）を名古屋新聞副社長小林橋川先生に、装幀並に挿繪を豊橋中學校教諭細島昇一先生に御願ひした。兩氏に深く謝すと共に、他方種々御盡力下さつた諸氏へ深甚の敬意を表する次第である。

昭和九年夏

著者

東三河の傳説目次

豊橋市

小萬の紅屋薬……………關屋町……………五
 おしいばち由來……………植田町……………二
 大松屋敷の白蛇……………東八町……………二五
 千体骨の地藏尊……………松山町……………二
 首切り地藏……………清水町……………二六
 戀路……………牟呂町……………二九
 山伏塚……………湊町……………三一
 觀世太夫……………吉屋町……………三三
 全久院の鱗……………東田町……………三五
 お弓橋……………東田町……………三六
 草履塚……………下條町……………三六
 血染の臼……………旭町……………三九
 徳合長者……………多米町……………四三

寶飯郡

牛の瀧……………東上村……………四三
 いぼ神様……………蒲郡町……………四四
 葵ヶ池……………小坂井町……………四五
 やらずの鐘……………長府町……………四七
 船井寺花井寺……………豊川町……………四八
 女籠石……………赤坂町……………五五
 川尻婆アの古提灯……………御津町……………五五
 羽衣の松……………牛久保町……………五七
 子だが橋……………小坂井町……………六〇
 馬方辨天……………豊川町……………六三
 鞘ヶ淵……………蒲郡町……………六五
 うなごうじ祭……………牛久保町……………六六
 犬頭靈神……………八幡村……………六八
 わくぐり様……………東上村……………七一

口紅螺……………鹽津村……………七三
 女夫松……………蒲郡町……………七四
 逢坂神社……………金澤村……………七四
 ならずの梅……………小坂井町……………七五
 八名郡
 石巻山……………石巻村……………七六
 子抱き石……………山吉田村……………七六
 鐘ヶ淵……………賀茂村……………七八
 かためのコノシロ……………石巻村……………七九
 カイクラ淵……………八名村……………八二
 三口ヶ池……………石巻村……………八二
 渥美郡
 おからす様……………福江町……………八三
 鸚鵡石……………泉村……………八三
 ぼくり石……………老津村……………八二
 久丸様……………神戸村……………八三
 三本松のこわめし……………福江町……………八三
 岩屋山……………二川町……………八六

イノ貝ミル貝……………伊良湖岬村……………九
 権現の森の棘なしばら……………福江町……………一〇一
 南設楽郡
 おとら狐……………長篠村……………一〇三
 白岩大龍王……………鳳來寺村……………一〇六
 琵琶ヶ淵……………長篠村……………一〇八
 名號池……………長篠村……………一一〇
 三橋の淵……………長篠村……………一一一
 淨瑠璃姫……………長篠村……………一一三
 鶴の脚……………鳳來寺村……………一一四
 北設楽郡
 桃・菖蒲・菊酒……………三輪村……………一二五
 甕割山……………名倉村……………一二七
 くらがへ淵……………名倉村……………一二九
 津具金山……………津具村……………一三二
 お菊大明神……………三輪村……………一三三
 穴瀧明神の大櫛……………段嶺村……………一三三

書籍、雜誌、文房具、事務用品
 萬年筆、洋畫材料、謄寫版
 額椽、トランプ、花札
 ランドセル、手サゲカバン

豊橋市吳服町

豊川堂書店

電話 二三六八番
 二五二五番
 振替名古屋一七六六番

林自見著

三河剛補松

和装菊版全一册
 定價一圓五十錢

本書は元文六年長山村の佐藤監物等に依つて編纂されし地誌三河二葉松に就き林自見が補正したものの。植田義方の考訂、更に長篠村阿部玄喜の加訂を経て安永四年に成る。本書は刊本なく寫本でのみ行はれて居るのを今回初めて出版されたのである。

發行所

豊橋市大手通公會堂前

松久書店

振替名古屋一〇四三番
 電話四九二五番

雜誌と書籍

豊橋市大手通

日新堂書店

電話三八〇六番
 振替名古屋一四〇八番

本店 知立町 電話一三番
 支店 安城町 電話二八番
 全 刈谷町 電話六一番

郷史
對照
國史年代表

豐橋市教育會
發行、編輯、印刷
優美印刷
10錢
2錢

豊橋名勝案内

大口喜六閣下
題字、山本松
二橋先生、發行、豐橋
橋商工發行、30錢
2錢

豊橋市とその附近

吉田初三郎先
生、筆、鳥瞰圖、
發行、協會、25錢
2錢

神道中心
寶飯郡史

寶飯郡神職會
編輯、菊千餘
郡圖、文字、箱入、
12圓
22錢

学習用郷土地圖

郷土研究会發
行、最近五萬
一分市ノ一、別
10錢
2錢

自動車就業免許試験問答

金城自動車
學校長大須
賀和助先生
60錢
4錢

牟呂吉田村誌

白井政市先
生遺著、和
本菊判、一、
1圓80錢
4錢

郷土教育資料

豊橋市教育
會發行、菊
判、一、六、
50錢
4錢

三河國三葉松

佐野監物印
著、菊判、
一、七、五、
1圓60錢
6錢

郷土地理教育指導体系

豊島松治先
生著、上、
四、〇、〇、
各、3圓
22

豊橋驛前

精文館書店

電話五三一〇番
振替四三三七
名古屋

◎祝乙部先生快著精文館發賣郷土關係圖書

郷土關係圖書、定一二割引、但此廣告ニヨル旨ヲ記シタル御注文ニ限ル

新刊書籍、特價本
中等教科書參考書
小學校教科書、詳解、中等學校入學受験用參考書類
雜誌、文房具、萬年筆
陸地測量部地圖

豊橋市札木町

文海堂書店

電話二二二二一番
振替名古屋三二九三番

愛知電鐵株式會社 豐橋營業所

原田涯州氏著

鳥居強右衛門勝商

實業界に繁忙を極めてゐる涯州、原田仙次郎氏が多年の蘊蓄を傾け寸暇を割いて執筆したもので、長篠戦と勝商、鳥居氏の素性、鳥居氏と妻子、その後の鳥居家

以上四章、二十頁に足らぬ小冊子ではあるが、よく決りよくこなし、氏の文才躍如たるものがある（四六版十四頁、寫眞版入、美本、定價拾錢）

豐橋市東八町

發行所 東海公論社

豐橋名菓
吉田音頭
志香須賀

氣分本位の
階上喫茶部

豐橋市廣小路

松月堂



高級銘酒

ツル正宗

沿線廣告
聯合廣告
廣告アーチ
金文字看板
ウキンドウ裝飾
人形スタンド
背景意匠

キラア

電話四二三六番

店看板設計
店頭裝飾
店裝改裝
店氣看板
廣告看板

オジタス

洋品
雜貨

豐橋市本町

力ネマン洋品店

電話二九六七番

清涼飲料水各種

☆カゴメサイダー製造元

近藤竹次郎商店

豊橋市松山町八
電話二七五七番

販賣部

新川公設市場 賣場

電話三七一六番

東田公認市場 賣場

電話五五五一番

袋物・靴類製作
紹ざし仕立と材料

御注文御好みに應じ
製作いたします

豊橋市大手通り

杉浦袋物靴店

電話五〇八九番
振替名古屋四六六六番
口座東京五〇四〇八番

写真と材料専門

カメラの店

鈴木泉崖堂

豊橋市廣小路四丁目
電話三六八二番

早く良く丁寧に
現像・焼付・引出

豊橋市中世古町

河合整骨醫院

河合徳次郎

電話3434番

豊橋、大崎間
豊橋、高豊間
高豊、豊橋間

定期
スバ

夕千バナ自動車商會

豊橋市小池町 電話八四八四番

乗合

福江行
田原行
白須賀行
富岡行
前芝行

貸切
市街乗合

豊橋自動車株式會社

電話
本店
三三七八番
一〇八二番
〇四四五番
前田江福
八二一五番

東三河の傳説物語

乙部 靜夫 著

小萬の紅屋藥

豊橋市關屋町賢養院の西裏墓地に

前月有庭信男
涼室悠清信女

と二つの戒名をならべた一基の碑を雜然たる多くの墓碑中に見出すことができる。巾一尺餘、高さ二尺三寸の船形碑で、風饗雨食こけむしくち損じてゐるが、これか即ち大近松によつて劇化され、

關の小萬は龜山がよひ、月に雪駄が二十五足

與作思へば照る日も曇る、關の小萬がなみだ雨

關の小の萬米かす音は、一里きこえて二里ひゞく

馬がものいふ鈴鹿の坂で、小萬女郎なら乗しよとゆた。

などの唄に名高い彼の伊勢鈴鹿「關の小萬」の墓である。この小萬については「吉田名縦綜録」や「東三名勝案内」或は關や豊橋地方に遺された彼女に關する事蹟がよくこれを證明してゐる。

×

小萬は關宿の揚茶屋山田屋庄兵衛の養女として育まれ十四、五の時分から毎日龜山藩の家老加毛寛齋の許へ劍道の稽古に通つた、これを小萬の龜山通ひといふ、その彼女の艶姿に思ひを焦がしたのが關近在大岡村の庄屋平兵衛悻與五郎で悪徒を語らひ途中に擁して腕力沙汰に及んだのを、當時は相當に腕も上達してゐた事とて、その理不盡を憤るの餘り、こらしめる心算のが、あやまつて與五郎を殺害してしまつた、

小萬は役人に召捕られたが、師加毛寛齋の情によつて救はれた。山田屋夫婦は始めて小萬の身の素性を明かす。

×

小萬の父細川藩の飯村新九郎は同藩矢野權太夫の恨みを買つて暗殺された。それが十八年前即ち慶長十九年秋の事である。小萬の母親雪枝は亡夫の仇を報ひんものと細川侯より拜領の備前三郎國宗の短刀を仇尋ぬる道中護刀として國を發足した、小萬の姉小菊は藩の速水氏に託され小萬は母親の懷中に頑是ない夢を貪つてゐた事になる。雪枝はなれの旅路を續ける事一ヶ年半、つひに病を得て小萬を抱いたまゝ關の町に行倒れた、哀れなその母娘を拾ひこんだのが山田屋夫婦で、彼らの介抱もむなしく「小萬成人の曉は何卒父の仇を討たして下さい」と遺言して雪枝は黄泉の客となつた。小萬はまだ見ぬ不俱戴天の仇に對して強い復讐心を燃やした。彼女はまづ姉の小菊に會ふべく熊本へ發足した。姉妹は速水一式の許で互の奇遇とはかない運命を語り

合つた。

當年五十四歳、背丈尋常、眼光鋭く、左耳から頬へかけて刀痕あり、眞庭念流の使ひ手——教へらるゝまゝに姉妹の腦裡にきざみ込まれたのは思ふだに憎々しい仇矢野權太夫の俤だつた。速水一式の取なしで細川侯より「仇討ち差許す」の墨附を得た姉妹は日ならずして熊本を發足、ところ定めぬ旅に上つた。小菊は小萬より二つ上の二十一歳、このとき寛永九年壬申春である。哀れ小菊はその旅先きで病死した。頼みに思ふ姉を失つた小萬は屈せず一人旅を續けること七ヶ年、二十八歳の春を迎へた。小萬が別にこれといふ思案もなしに東海道を下る途次、濱松驛附近でたづぬる仇の俤を夢のやうにちらと見る。年の頃六十一、二、そのさびしさを宿した俤や、身装のすぐれぬところは零落を物語る浪人者、左耳から頬へかけて一線あざやかな刀痕……その浪人者を仇矢野權太夫とにらんだ小萬のひとみには狂ひがなかつた。既にこの時あきらめかけてゐた復讐の心がふたたび小萬の身体を熱くした。それからの數日間、

小萬の仇に對する準備は十二分に整へられて行つた。小萬は巧にさそひをかけて權太夫を三方ヶ原へ釣出した、權太夫は見も知らぬ女から名乗りかけられて仰天する。

「お前の親父を殺したのは、それだけの理由があつたからだ、然もそのためにおれは自分の生活へごんな不幸を

釋明とも呪咀ともつかない

世の皮肉を呪ふかのやうに
て走る「父の仇！」國宗の
れる、そんなときこの仇討

方ヶ原を通り合はせた三州

門だつた。彼は小萬へ助太刀した。苗字帯刀をゆるされてゐただけあつて市郎右衛門もちろん劍道の心得はあつた。小萬は首尾よく本懐を遂げ市郎右衛門に伴はれて吉田へ來た。



招いてゐるか知れない」

いさうした自己辯護が、恰も

老武士の皺枯れた唇を漏れ

短刀が小萬の手にふりざかゝ

場裡へ飛込んだのが、恰度三

吉田神社の別當山田市郎右衛

山田市郎右衛門はいろ／＼の意味においてい、拾ひものをした譯である。無論この仇討ちについては細川侯の墨附もある事とてとがめられるどころか、却てその義勇を世の中からもてはやされた。市郎右衛門はすツかり男をあげてうけに入る。その後小萬は拒むを得ずして恩人市郎右衛門の別妻となり紅屋薬を賣り出して評判をとつた。この紅屋薬以後の小萬については却々面白い挿話がある。小萬は毎日坂下の居宅から豊川河岸へ洗濯に出で大盥へ一杯水を汲んで悠々持ち歸つたといはれてゐる。ある日小萬の洗濯姿にいたづら氣を起した土地の若者三四人が小舟を操りながら洗濯最中の彼女を水へ引入れやうとした。が却て小萬のために舟を覆へされてしまつたとある。小萬がその美しいに似ず大力をそなへてゐた事は何れの説においてももうなづかれる。小萬の調合して賣つた紅屋薬は三代目の市郎右衛門まで同じ坂下で發賣してゐたが四代目の平八に至つて坂下の居宅を引拂ひ本町横町に轉居し、その際平八はこの紅屋薬の發賣權を坂下の知己に譲つたので以來その權利を受つた家が代々これを調合し、

こゝ三十餘年前まではその店もあつたが賣藥規則が面倒になつたのでつひに絶へてしまつた、紅屋薬はたゞに豊橋で知られてゐたのみではなかつた。舊吉田の頃は東は濱松から西は岡崎附近まで子供のひきつけに非常な効能のある紅屋薬といへばあの仇討で名高い小萬の薬かと誰にもうなづかれた程有名だつたさうだ。小萬は六十餘歳、即ち天和四年六月三日病死した。

x

子供のなかつた彼女の家は養子を得てあとをつがせた。三代目までは依然山田市郎右衛門といつたがこの三代目も矢はり子供がなくて養子を取つた。その代から山田屋平八といつて五代目までつゞいた。小萬から五代目の平八に女二人の子供があつて、その長女は天保十三年生れで他家へついで、これが現在豊橋市湊町字坂下に小間物商をいとなんでゐる牧野辰藏氏の母である。よねといつて大正十三年に病死してゐるこのよねの妹に藤吉といふ養子を迎へ山田屋をついだが明治維新前山本と改姓してそ

の息山本半次氏が豊橋市手間町に住んでゐる。小萬が仇討の時使つた細川侯拜領の國宗の短刀や文箱が前記牧野家に家寶として傳へられてゐる。

「おしはいち由來」

天照大神のおいひつけで素盞鳴命が悪賊誅罰の途に上る頃、その別働隊として海手の賊に當つてゐた武甕槌命、大雀命、伊佐波止命、宇迦御魂命、岡象女命、玉柱屋比女命といふ男女六人の命が航海中暴風雨に見舞はれて進路を失ひ、飢えと寒さに苛まれながら漂流十數日、七福神ならぬ破れ船に身を乗せて、ヤツと流れついたのがこの海邊、互に助け合ひながら辛うじて岸へは上つたが、もう殆ど歩く氣力さへ失はうとしてゐた。武甕槌命は岡象女命を肩に、伊佐波止命は玉柱屋比女命を背にして這ひづり、やうやく見出したのが里人の家。命たちは手を合はせて食を乞ふた。けれど里人は見馴れぬ一行の風態を見て怪しんだ。よこれ破れた衣服、よもぎのやうな髪や髻、それは丸で熊襲のやうな恐

ろしい賊の姿に映つたのだらう。里人は裏口から逃げ出して、里の人々へ椿事を傳へた。賊に違ひない。一物だに恵むことはならぬ、早く里から追ひ出してしまへ——六人の哀訴はさうして無残にも拒まれた。飢えと寒さと失望。既に動く事すらできなかつた。命たちは世の無情を怒り、地に伏して泣いた。翌朝東雲の訪れるころ、里人たちは六つの死骸が里外れの森蔭にかく抱きあつてゐるのを見た。亡骸を調べて見ると高貴の命たちである事もわかつた。里人たちははじめて自分たちの非を悟りねんごろに死体を葬つてそこに塚を建てた。これが豊橋市植田町村社車神社境内のひさご塚である。

x

この六柱がつまり車神社の祭神である。この邊一帶が海岸であつた頃のことだ。同所から發掘されたものに劍、勾玉、土器、埴輪等があり、埴輪は現在帝國博物館にをさめられて居る。明治中頃寶物となつてゐた其うちの劍を金に代へやうと近村の百姓

が盗み出したことがある。ところがこの劍の靈氣におびやかされ、社へ元通りにをさめ返したが間もなく百姓は發病して死んだといふ。毎年十月二十九日に行はれる祭禮には「おいしいばち」と稱する變つた祭事が營まれる。祭事に當るものは當番の八人と客側の二十人。主(當番)客すべて袴着用當番の家で食事をとる。この食事といふのが大變である。毎年順送りでも否が應でも出なければならぬ。お客さん側の選手二十、圖抜け特別の大きな親椀へ、當番が盛りあげて出すだけはどうしても食はねばならない。食べ残したり、或は膳の外へ一粒でもこぼさうなら、さア事だ、祭りどころではない、村人の顔が眞ッ蒼になる。凶年の前兆とあるからだ。だから眼を白黒させながらみんな必死の生命がけ、それといふのも六神をうえに死なせたお詫の意味。

「決して食物を惜しんだのではありませぬ」

とその證據を見せやう爲の苦しい祭事なのであるさうな。

大松屋敷の白蛇

維新少し前——安政頃のでき事である。吉田藩に祿高二百五十石、御馬廻りを勤める酒井八十右衛門といふ藩士が今の東八町にすんでゐた。妻女は幸枝と呼び酒井氏がきれう好みで娶つたほどの女だから家中評判の美人だつたに違ひない。酒井氏は當時三十六七で藩屈指の家柄だつた。牟呂村百姓某の倅由次郎といふ若者がこの酒井家に下僕として召使はれてゐたが、至つて主人思ひ、陰日向なく仕へたので主家の受けもよく、殊に妻女の幸枝は一入由

次郎へ目をかけてゐた。由次郎も年頃だつた。

「お武家の掟はきびしい故、よく慎まねばならぬ」

と兩親のいつた言葉も胸にないではなかつたがなるゝにつれてふとした心もおき下女の某なるものと道ならぬ事をした。

それを知つて憤つた酒井氏は即座に二人を放逐しやうとした。幸枝は

「女はともかくも、由次郎は實直者、將來を戒めてこの度ばかりは妾に免じ御許しが願ひたう存じます」

と嘆願したので、酒井氏は女中だけを放逐し由次郎は屋敷に止めた。この事あつて以來酒井氏は妻と由次郎の間にとかく疑惑の目をさしはさむやうになつた。いひ落したか由次郎は當時二十二歳、農家の育ちに珍らしい美男子、加へて酒井氏と妻との間にはかすがひたるべき子供がない……一度妻の上に疑ひの眼をむけた酒井氏の心中は穩かでなかつた。一日勤めから歸つて、迎へに出ない妻をいぶかりながら足音を奥座敷に忍ばせたとき、その庭に面した縁側に妻と由次郎の狼狽へてゐる姿があつたが、とがめるだけの用意はなかつた。いきごほりをおさへて顔には出さずその日は黙認したが求めて得た愛妻だけに酒井氏の胸は火と狂つた。いらいらした幾日かゞさうした酒井氏の上に過ぎていつた。

x

同藩の徒步目附を勤める吉田藏人といふ能友達がすぐ近隣にすみ絶えず往來してゐた。其長男で采女といふ兎角の噂ある道樂者が、早くも幸枝の美貌に心を動かし、酒井家に入りたつて主ある花へ恐るべき野心を懷いてゐた。幸枝は事に觸れ怪しげな素振りを見せるこの采女へ警戒を怠らなかつたが、同じ藩でしかも夫の親しくする吉田家の相續者であつて見れば強硬な態度に出て相手をはづかしめる事もならず、まゝよ自分さへしツかりしてをれば——と柳に風と受けながしてゐた。春宵おぼろな或る夜の事、酒井氏は家老某氏の家の祝事に招かれて家になく、幸枝が奥の部屋にあつて新参の下女を相手に針仕事をしてゐる時案内もなく入つてきたのが例の采女、八十右衛門の不在を知つて訪れたものだつた。

幸枝は思はず眉をひそめた……。お茶を汲みに下女が立つと、采女はそれへ追被せるやうに

「茶ならもう結構、今宵はちと御内儀へ内密で談じたいことがござればしばらく遠

慮して貰ひたい」

と臆面もなくいつた。しばらくして男の無禮を咎める幸枝の聲がした。突然、物の壊れる音、疊の上を揉み合ふはげしいひしめき——下女は蒼くなつて由次郎へつげた。由次郎は奥の部屋へ飛込んでいつた。

「下司、返報するから覚えて居ろ」

采女は疊さはりも荒々しく出ていつた。

x

戀に破れた吉田采女はその腹いせとして幸枝と由次郎の間に醜関係のある如く酒井氏へ讒訴した。采女を信ずるのではなかつたが、既に二人の間へ疑ひの眼を注いでゐた酒井氏は、いよ／＼自分の想像の忌むべき結果となつてあらはれて來たことを感じた。氣まづい空氣が酒井家をくらくした。酒井氏はつひに一度運んだことのない足を茶屋にむけ酒と女に惑溺した。幸枝はその原因が何にあるかを知らなかつた。由次

郎はさびしい女主人の日常を人一倍氣にかけた。盆の十五日、酒井氏は夜ふけてから酒氣をおんで歸つて來た。寝る前に水を浴ることを習慣としてゐた酒井氏は由次郎を呼んでその仕度をさせやうとしたが、部屋に居ない女中もゐない。いら／＼しながら奥へ這入つてゆくと、妻の影法師が障子に動い思慮はなかつた。かつと外して躍り込み矢庭に由



「出てうせ、成敗せう」
由次郎はたましひも身に

にそはぬ有様でがた／＼ふるへ

てゐる。幸枝は血の氣のうせた夫の顔をみつめてゐる許りで哀れな由次郎を取なすための辯解も口にはできなかつた。酒井氏は庭にある松の大木の根元へ由次郎をづるづる引ずつていつて、物をもいはずに斬つてしまつた。血飛沫が松の幹へベツトリつい

た。妻女は涙ながらに由次郎の汚れない誠實をといて恨んだ。酒井氏は冷靜に返ると始めて自分の犯した罪の前に身をおのゝかせたが、既におそかつた。幸枝へかたく口止して翌朝、由次郎の死骸を澤庵のあき樽へつめ、これを牟呂の由次郎の實家へ送り届けた。

×

ひし隠しに隠してゐたのだが、いつとはなしにこの事が口から口へ傳へられ、怪し火が出るとか松の木にゐる白い蛇は由次郎の怨靈だとか、奇怪な噂がひろがつた。幸枝はその後ふとした病がもとで死に下女も去つて代りは來ず、酒井氏一人ひろい屋敷に噂をよそのさびしい生活をつゞけてゐた。三年目酒井氏は藩の釣りすきに誘はれて牟呂の海へ出かけた。その歸途、咽喉がかわいたので水を求めて、とある農家へ立ち寄つた。不思議にもその百姓家が由次郎の實家で丁度三年忘の法要をいとなんでゐるところだつた。酒井氏は眞ッ青になつて飛出した。

家につくと俄に發熱して數日後怪しく狂ひながら悶死した。家は建かへられたが今でも由次郎の斬られたといふ大松もあり、白い蛇もあるさうだ。そして現在に至る代々その家にすむ人は冤罪に死んだ由次郎の怨みをおそれ、決して澤庵漬を口にしない。

千体骨の地蔵尊

たところである。

筑前遠賀郡葦屋浦は壽永七年八月岩戸城に入らせられた安徳帝が源氏方の緒形三郎惟義、日田次郎永秀等の軍に追はれ原田次郎種直が防戦も力及ばず山鹿から宇佐へと急がせ給ふた折、心細く思召されつゝ船に召されたところであり、さきの文治元年二月には參河守範頼並に緒形惟隆、同惟義等の大軍を一手に引受け原田種直が平家興亡の一戦と必死の奮戦に敵を惱まし二男嘉摩兵工尉種國並に弟美氣三郎敦種を失ひ、一族郎黨の屍を濱邊の砂にうづめ

葦屋は遠賀川の川口にあり、西北に響灘の波濤をみかへ磯馴松も万古蒼青の色をた

へて、潮風怒濤にその貞節を誇つてゐる。筑紫の舊邑として上古から著名である。

長汀曲浦波靜かに響灘の紺碧を磯馴松の木立にすかして見せる、こゝ葦屋ヶ浦の濱
碗豆紫に濃い砂丘に立つて十二、三歳の少年が十七、八歳の従者と共に松の根元、積
藁の下に置ける小石なごを取除けて土深くほりあばき元治の戦ひに討死した原田家郎
黨の枯骨をひろつて甕に入れてゐる。それは種直の末子花若丸で従者は種直の家臣荒
岡源太左衛門の一子藤王丸だった。

種直が鎌倉へ禁獄されたとき花若丸はまだ母の胎内にあつた。種直武運拙くして二
男種國を葦屋浦に討たれ長子種榮三子種恭また禁獄の憂き目を見た後は一人さびしく
故山の節を守つてゐたが、花若丸生れて長ずるに及び父を慕ひ母にせがんだ。賢母に
して貞婦の種直の室は花若丸を膝に抱き、御佛の袖に縫ることを説き諭した。建久
八年花若丸十三歳、葦屋に討死した荒岡源太左衛門の一子藤王丸を伴ひ葦屋に來つて

一門郎黨の枯骨を集め土ごねつて千体の地藏尊を作つた。春やむかし、筑紫に覇をと
へた原田種直の末子花若丸はたつた一目父に目みへ奉らんの悲願をいだき千体の地藏
尊を厨司に納め藤王丸の肩に負はせて筑紫を後に鎌倉へと志した。恰も頼朝が罪障消
滅のために尊神拜佛の菩提心を起し證菩提寺を創建した折柄だった。

千体の地藏尊を負ひ巡錫して歩く花若主従が頼朝の前に召された事決して偶然では
なかつた。花若丸は頼朝と政子の前で佛敎の法悦を釋き、一切衆生御佛に絶らば八万
四千金色の如來燦爛の光を拜み得ると誓つた。煩惱即菩提生死即涅槃、思ひ内にある
ものは龍華の三會に逢ふといへども凡夫出離の直路を知らずさめてまた悟るものは虎
穴龍潭にあるといへど倫伽成就の快樂多き事を縷々數千言した。道理深甚、法談微妙
を極めたので頼朝政子ともに深く感動して、賞の沙汰に及んで望めといつた。花若丸
は

「出家の身なれば金銀財寶の私慾聊かもなし、大宰少貳筑前守原田種直並に兄種恭の兩名を御赦免賜はらば身に餘ることにて候」

と涙ながらにいつた。頼朝はその孝心に愛で十三ヶ年の勞苦さこそとあつて花若の願ひを容れ種直と種恭を赦免した。建久八年九月十三日のことである。鎌倉武鑑に

種直は平家に味方せしこと右幕下御憤り強く鎌倉へ召されて平山季重に預け給ふそれより十三年を経て建久八年御赦免を蒙る。

とあり、寛政重修諸家譜には

原田次郎種直平相國清盛につかへ大宰少貳となり、平家没落のとき囚人となり鎌倉にあり十數ヶ年の後赦免ありといへども故郷にかへるを恥ぢて三河久木村に閑居す

とある。

×
 赦免された種直は頼朝から三河國足助の庄を賜はつた。天日を仰ぐさへ叶はなかつ

た種直と種恭は禁獄生活十三年かくして筑前の國へ歸るを得、佛門に歸依した。種直を入道常榮と號し室また榮陽尼と號した。讀經誦文ひたすら佛恩の廣大を謝し、法悦の歡喜を説いて多數の人を教化した。建久八年から五年を経た建仁二年花若丸の母榮陽尼は三河飽海の庄が海浪珠を翻し潮汐去來してその明光風媚恰も筑前の葦屋浦に似てゐるのでこの地を下し、由緒因縁ともに深い千体骨地藏尊を本尊として一寺を建立した。それが現在の豊橋市松山町正林寺である。この附近は原江の境で、花ヶ崎といつた時代がある。それは一旦破滅した原田家を花若丸の力で昔に返し、萎れた花が利益によつてふたゝび万朶の花と咲いた——といふところから傳へられたものである。

×
 また山號を橋北山といつたのは後柏原帝の永正七年八月二十七日駿、遠、三に大浪あり、遠江の敷智濱名の間切れ崩れて、湖ができ、干潟が生じ川となつた。現在松山の一端を流れてゐる柳生川は元花ヶ崎と福岡との間にあつた入海が干潟となり流川

になつたもので、橋を柳の木で架けたので柳生橋、正林寺がその橋北にあるので橋北山と稱へた。正林寺の紋に軍配團扇を使つてゐる。これは原田家中興の祖大藏春實が天慶三年藤原純友討伐の時、朱雀帝から錦の御旗と共に軍配團扇を賜はつたのでこれを家紋にしたと傳へられてゐる。

種直は赦免の十六年後即ち建保元年三月三日七十三歳で歿し室祭陽尼はそれより四年たつて同五年十月六日に亡くなつたが三河における子孫がかなり近代まで續いてゐた事は史實にみてあきらかである。

首切地蔵

豊橋市中柴町にきくの湯といふ錢湯がある。地藏堂のあつた庵跡でこゝからこんこんと清水が湧出し首斬地蔵の清水とて、奇しき物語りが傳へられてゐる。むかし上傳馬に藤三郎といふ者あり、その妻心ばえ優しく容姿また人に勝れてゐた、夫婦仲睦まじく間にできた二人の子供の將來を楽しみに暮し

てゐたが一夜家から火災を起し、子供の一人を失つた。涙のうちに野邊の送りはすましたが世間態を恥ぢ普請なども華美にはせず總べて遠慮勝に暮してゐるうち二人目の愛兒また病を得て黄泉の客となつた。

重る不孝に夫婦の悲歎は言葉に盡しがたく、妻は共に死なんといふを、人々に慰められ泣くく野邊の送りをいとなみ、その菩提のためにとて彼女が年頃歸依してゐた小池潮音寺の觀世音（潮滿觀音）に夜ごと參詣して二人の子の追福を祈ると共になるならば子供を授けたまへと懸命に祈願をこめた。夫藤三郎は風雨暗夜をいとはず參詣する妻の上に疑ひをいだき、ある夜ひそかに妻のあとを追ひ潮滿觀音に彼女の參詣するを確かめ、さらにその歸途をつけるうち、妻の姿は中柴の地藏庵に立ちよつた。

地藏堂の中には妻を待つ怪しの人影があつた。藤三郎は自分を裏切つた不貞の妻と愛する妻を自分から奪つた憎むべき男に對して一刀兩斷の處置を執つた。斬つて置いて無我夢中で我が家へ飛歸つて來た彼が、その時の手應へによつてあの姦夫姦婦が鮮血に染つて折重つてゐる報復の快よさに穩やかなと門を訪ふ妻の聲があつ

奇怪なこともあるもの
 「今宵は何やら胸騒ぎへ參詣なし歸るさに中柴の仕業か竹杖の如きものにて打叩かれそのとき氣遠くなりしが、暫らくして心地づき斯くは歸り來たりしなり」と語つた。藤三郎はいよ／＼奇異の感を深くし、妻を伴ひ中柴の地藏庵へ馳けつ



庵へ入つて見るに安座したまふ地藏尊像には首が失はれてゐた。此の奇怪な事實を目のあたりにした藤三郎は、己れの心いやしく妻を疑つた自分を恥ぢ、妻の身代りに立たせたまふた地藏尊のありがたき利生、肝に銘じて、夫婦の信心いよ／＼堅固になつた。これより藤三郎を人呼んで石斬藤三と云つた。此の首のない地藏尊は寶飯郡下地町の永福寺に安置されてゐる。

戀路

牟呂村某に召使はれける女、前芝の湊といふ所に住みけるをのこと契りを経て、夜毎に海上を渡りしとなん……(吉田名縦綜録)

いつの頃か渥美郡牟呂村(豊橋市牟呂町)のさる物持の家の召使ひに、みめうるはしい乙女がゐた。乙女は前芝の湊にすむ若者となれそめて以來人々の寢静まる刻限をはかつては毎夜のやうに海を渡り若者の許へ忍んでいつた。が、乙女の純情にひきかへ若者の戀は氣まぐれだつた。

一月とたち二月と過ぎるうちにいつから來なくなつたとも知れず若者は濱邊で乙女を迎へなくなつてしまつた。そして秋風つめたく海面をおとづれる頃、若者は乙女が合圖の礫を部屋の窓際へ投げるのにさへ腹立しさを感ずるやうになつてしまつてゐた。若者は二日隔きにしてくれといつた。次ぎには五日目にしてくれといつた。しかし乙女は若者をにくまなかつた。つれなくさるゝほど彼女はどこまでも素直だつた。

逢へずにむなしく歸る日が重つていつた。がそれでも乙女は毎夜かよつた。秋も一入深まつて風のはだにしみる頃、若者はふと、たまさかに逢ふ女のはだが俄につめたくなつてきたことを感じたが、女を憐れまうとするよりはその執拗な女ごゝろに恐怖さへいだくやうになつた。既にそのときこの若者には他に意中の女ができてゐたのだつた。冬になつた。乙女は矢張かよつてきた。若者は乙女の毎夜海を泳ぎ渡つてくるその目標が前芝の湊にある漁師たちの航路を示す燈臺の灯にあることを知り友達とは

かつてある夜これを消して置いた。

いつになく波の荒い夜だつた。翌朝何も知らない前芝の村人たちは、なぎさに横たはつてゐる頭に着物をゆわへつけた哀れな乙女の死骸を取りまいて立騒いだ。村人たちは同じその朝、發狂して前芝の濱邊をさまよつてゐる一人の若者をいぶかしさうに見た。その若者が恨みをのんで死んだあの乙女のすんでゐた牟呂の濱邊へ死骸となつて寄せつけられたのはそれから三日目の曉方だつた。

そして不思議な事にはその若者もあの乙女と同じやうに頭へ着物をゆはへつけてゐた事だつた。乙女の死骸のあがつたところ、そして若者の死骸のあがつたところ——以來その二つの濱邊を村人たちは同じ戀路と呼ぶやうになつた。けれども戀に死んだ二人の恨みは長く今でさへ波は戀々といふ音を傳へるといふ。

山伏塚

現今の上傳馬町と湊町（坂下町）の間に吉田城外廓の大門（總門）があつた、此の門の西側に楓樹一基の塚があり人呼んで山伏塚といつた。

昔、此處で仇討ちが行はれたと傳へられてゐる、討つた方の用ひた刀は當時坂下町に住んでゐた兼房權兵衛といふ刀劍鍛冶の鍛へた業物、一方討たれた山伏の所持してゐたのが同じ吉田住來廣房の鍛へたものだつた事から兼房の名が一時にたかまつたのに反し廣房の刀は人々から忌み嫌はれ次第にその名衰へたといはれてゐる。

觀世太夫

豊橋市吉屋町吉田山龍拈寺の山門をくゞるとすぐ右側に長養院といふ塔司があつて、その墓地の西南隅に大きな縦の木がある。縦の傍らに高さ約二尺位と思はれる自然石の墓碑が蓮葉式にきざまれた臺石にすわつてゐる。これが觀世左近太夫の墓である。墓面には淨光院殿玉菴宗金居士觀世左近太夫之

墓とある。その左手に天正五年丁丑正月廿九日ときざまれてゐるが、墓誌の字体彫刻から推斷して天正時代に建られたものとはうけとれない。

もとの墓は手間町の西光寺境内にあつて、中世こゝへ移されたものであるから、當時縁者の者が改造して、その歿年を追つて建立したものであらうといはれてゐる。觀世太夫の出所並にその閱歴等については當地方ではあまり廣く知られてゐない。従つてその詳かなことはわからないが、太夫の生家は元伊賀國杉の内服部村服部氏の別家で、南都春日祠の彌宜を勤め代々猿樂を傳へた名門で彼の觀世小次郎信光や觀世常太夫元忠などもこの一門から出てゐる。

左近太夫は吉田猿屋小路の假住居で何者とも知れぬ者の手にかゝつて非業の最期を遂げた。即ち太夫の墓碑に刻まれてゐる天正五年正月二十九日のでき事である。太夫

の死については色々な説が傳へられてゐる。

太夫がまだ京都に和樂謡曲の師匠をしてゐる頃、京は祇園の容姿婀娜たる妓女と馴染みこれを妻に迎へたが、この女至つて嫉妬の念深く、惱まされた太夫がつひに女を棄て、京を逃がれ、三河國渥美郡吉田（豊橋）に至り、猿屋小路（中世古町）に假りの住居を營んだのを、置去復縁を迫つたが應じないの讐したのだともいふ。



られた妻の妓女がつきとめ、浪人者を語らひ太夫へ復

又一説には、此元龜、天正年間三尾から彼の信長、秀吉、家康らの英傑出でた群雄割據の戦國時代で偶々謡曲師などが各殿中を往來し間者となつて内通したといふ噂の行はれてゐた折柄の事として、或はこの觀世左近太夫の横死もまたさうした疑ひのため暗殺されたものではないかとも傳へられてゐる。

全久院の鱗

豊橋市東田町の古刹全久院には今日でも大蛇の鱗と稱するものが寺寶として残つてゐる。

いつの頃か、物憂い春の一夜、和尚の部屋へ忽然として水の垂れるやうな美女が現はれ悟りの道を教へてくれと乞ふので和尚は心よく受け、やさしく女をなぐさめた。女は翌夜を約して去つたがそれから一月ばかり毎夜和尚の許を訪れた。

「そなたは定めし魔性のものであらう。包まず明して下さらぬか」
女は、はら／＼と落涙して、しばらく悲しげにうなだれてゐたが、やがて、蒼白な顔をあげ

「わたしは八名の郡一鍛田のカイクラ淵に棲む蛇体です。お情によつて、やつと悟りの道がひられました」
と厚く禮を述べた。和尚は、女の身体がごとく不自由さうなのを見て經文を唱

へながら静かに背を撫で、やつた。間もなく車軸のやうな豪雨となつた。女は蛇体と化し雲を呼んでカイクラ淵へ立去つたが和尚の部屋には黄金色の鱗數枚がさんせんと落ち散つてゐたと傳へられる。此の鱗が大早のときに祈る雨乞の御神体である。

お弓橋

豊橋市東田町縣社神明社の裏朝倉川にお弓橋といふ橋があつた。區劃整理で新道が開け今では橋も立派に架け替られ西脇橋と地名をとつて呼びかへられてゐる。

八名郡牛川村に吉田城主から苗字帯刀をゆるされてゐる豪農があつた。兵太左と呼び、伊勢で花籠を振つた程の器量人だつた。その深窓にお弓といつて美しい娘があつた。いはゆる當代のモダン・ガールで、義太夫が習ひたいといふ。外ならぬ愛娘の願ひだつたので父親もそれを許した。お弓が師匠に選んだのは吉田城下瓦町にすむ京右衛門といふ美目秀麗の若い義太夫師匠だつた。

×

ごちらから誘つたのかお弓と京右衛門は日ならずして人目をはゞかる仲となつた。お弓は男を愛する一念から下男に命じて朝倉川へ橋を架けさせた。男の通つてくる道を少しでも便利にしてやりたかつたのである。それを知つた彼女の父親兵太左は心痛のあまり京右衛門に出入を
禁じ娘へもかたく監視人をつ
けてしまつた。



お弓と京右衛門に煩悶懊
た、京右衛門はお弓の心盡
と姿をあらはした、この日は前夜來の大雨で朝倉川の水量が増してゐた。お弓の死骸が兵太左の家の井戸から引きあげられた頃、京右衛門の溺死体が朝倉川の下流の豊川に
発見された、夜ごと怪し火が瓦町からお弓の橋を渡つて牛川へかよつた、歸りにはそ
の怪し火が二つに殖えてもつれながら橋まで來ると、一つは南へ、一つは北へ、名ご

りおしげに別れ飛んでゆく、お弓と京右衛門の魂だ——人々はさういつて襟をつめたくした。

x

兵太左の家ではこれを氣味悪がつて、男の魂が渡れないやうにお弓の架けた橋を打ちこわした。その夜から朝倉川の兩岸に一ツづゝの怪し火がやるせなげに狂ひ飛んだ兵太左の家の者はこれを目撃して主人につげた。間もなく兵太左の家の者の手で新しく橋が架けられた。そして橋の附近へお弓と京右衛門の印ばかりではあつたが供養塚をたてた。それ以來怪し火は飛ばなくなつたといひ、その夫婦塚のあつたのを十數年前に見た人もあるとか。土地の人は西脇橋といはないで、今日でもお弓橋と呼んでゐる。

草履塚

豊橋市下川町正樂院境内の太子塚は、文武天皇の御子竹内王子の御靈を祀つたところだといはれてゐる。王子薨去のとき十二人の侍女が悲しみの余り附近の池へ投身して殉死した。その池を御所ヶ池といひ、侍女たちの脱ぎすてた草履を埋めて葬つたのが現在の草履塚だと傳へられてゐる。

血染の白

舊藩時代の話である。現豊橋市旭町四番町、當時の吉田藩足輕屋敷に越井新兵衛（その子孫である現住者のため特に假名を用ふ）といふ四番組の足輕組頭がゐた。十五を頭に九人といふ子澤山の上に兩親を抱へ、僅の扶持でもつて一家の生活を支へてゆく事はかなり困難だつた。更に組の頭をしてをればそれ相應の體面をも維持しなければならぬ。貧乏武士はこゝに大きな苦しみがある。越井家の財政は全く窮迫のどん底にあつた。ある年の押つまつた大晦日の晩、附取りの商人たちは越井家に詰かけて旦那を出せと呻きたてた。

越井家ではさうした時、裏庭で子供たちのために年越を祝ふ印ばかりの餅を搗いて
 みた。妻女が主人にかはつて

「いましばらく待つてくれるやうに」
 と泣かんばかりにして懇願した。

「一年の切り日ですからけふはごうしてもいたゞかなければ」

一人がいふと、他の者たちも異口同音にそれを主張した、結局御主人にあはなけれ
 ばといふのである、妻女も近隣の手前をはち、その旨を夫につげた。新兵衛は餅つく
 手を休めてゐたが「通せ」といつた、一同はぞろ／＼と庭へ廻つてきた、子供たちは
 追はれて部屋のうちへ去つた、忤ふる新兵衛の顔と、手がへしする妻女の顔に、同じ
 沈痛の色がみなぎつてゐる。

「旦那けふはごうかしていたゞかねばこまりますんで」

一同が口を揃へた。

「家内からも申し聞けた通りけふは手許にない、松でもとれたなら必ず都合いたす
 から、今宵は子供たちも餅つきを楽しんでゐる最中ごうか皆引取つて貰ひたい」

二升か三升の僅の餅も、節季の鬼たちの眼から見れば贅澤なものゝやうに思はれた
 であらう。彼らは更に引取らうとはしなかつた。階級的の反感と、多勢をたのむ群衆
 気分が彼らを支配した。手をつかばかりにしてゐる越井新兵衛に罵詈讕を浴せた
 新兵衛は情を知らぬ商人たちへ心から憤つた。妻女が夫の顔色を見ておろ／＼しな
 がらその袖にすがつた時は既におそく、商人の一人が鮮血にそまつてもんどりうつて
 みた。他の商人たちは色を消して逃げ出した。新兵衛は妻の手をかりて死骸を裏の小
 藪へ押かくした。

x

臼の中のつきかけの餅を見るとベツトリと血潮が飛んでゐる、縁側にならべた一の
 しの餅もその飛沫を受けて不吉な色を染てゐる、新兵衛は男泣きに泣いた妻女も泣い

た、新兵衛はその夜のうちに自首してでたが情狀充分に酌量されて何のともがめもこうむらなかつた。翌年の大晦日に餅をつくつと臼の中に血が流れた、次ぎの年も餅が血の色にそまつた。今日でも越井の家では餅をつかない、そしてこの日が近づくとき家にある刃物といふ刃物は全部嚴重に布へつゝみからめて目のとゞかぬところへしまつてしまふ。

徳合長者

昔、八名郡多米村（現豊橋市多米町）に徳合長者といふ富豪が住んだ。ある戦ひに米山の守將が水を断たれ窮余の一策として此の徳合長者をたのみ、白米を馬の背中に浴せて見せた。遙かにこれを見た敵は馬を水で洗つてゐると思ひ込んで驚き水攻めの愚策を中止したので城兵は危ふく助かるを得たと傳へられ今でもそこを米山と稱んでゐる。

朝日さす夕日かゞやく木の下に黄金千駄板千駄

さういふ俗謡が残つて居る。これは徳合長者が盜難をおそれて米山へ金を隠したといふ説から傳へられたもので、黄金狂時代の波に揉まれて最近、怨の深い連中が此の埋没金を掘り出さうと山中を掘り廻した結果、出たのは石ころばかりだつたといふ飛んだナンセンスさへ生んでゐる。

牛の瀧

豊川鐵道沿線、東上驛から八町「靈山本宮」を源とする飛流直下六十尺の「牛の瀧」は宮下川といつて設樂の郡民、寶飯の農民との間にはどうしてもなくはならぬ生命の泉であつた。従つて水不足の夏になると兩郡民の間にきまつて水争ひが起きる。設樂側では、流れの全部を己れの田へひき込まうとした。寶飯側もそれに對抗して決死隊を派遣する。毎日多勢の者が傷ついた。

設樂側が工事を中止して退くと、寶飯側が代つて堰止めやうとする。血で血を洗ふ争ひが何年も何年も繰返されたが、どちらの工事も一度として成功しない。双方が徹夜

で頑張つてゐるとある朝、流れの真ッ只中に見るも恐ろしい黄牛がぬッとばかり突ッ立つてゐる。敵も味方も膽を消して逃げ去つたが、翌朝いつて見ると、そこは意外にも一流の瀧となり瀧壺のうちに例の黄牛がぼつかりと浮いてゐた。おそれて以來、兩郡民は水争ひを断ち、「牛」を結ぶの神として提携した。「牛の瀧」の起りである。此のモウ君を祀つた祠も未だ残つてゐる。

様神ほい

寶飯郡蒲郡町大字五井字東郷にある古墳で醫王神、傳へて俗に疣神様といふ。

昔、西郡の城主松平水頭の姫が疣に悩み醫藥加療に努めたが更に効なく易に従つて此の神に詣で巖上の靈水を塗布すると忽ち治癒した。俗謠にもうたはれてゐる。

疣に惱んだ姫君も、尊い神の靈験で、忽ち治癒して雪の肌、月に三度の禮詣り。

池ケ葵

伊奈城趾の東北二町、中江川に通じる田の中の數坪の小池で、一名「花ケ池」とも稱び、池中に「花ケ池」と刻んだ石柱が建つてゐる

此の碑は文化十年、江州膳所城主

本多家の臣黒田忠明の

建立である。往昔、城

主の産湯の水を汲んだ

ものだと傳へられてゐる。

享祿二年五月、清康



は吉田城を抜くべく兵三千を率ひて伊奈へ到着した。伊奈城主本多正悠迎へて清康に屬し、御油、下地へ放火して氣勢をあげた。吉田城主は牧野成信である。

「さては來つて首を授けんとするか」

成信は二弟、田次、新次郎と共に城兵千余人を従へて城を出で吉田川(豊川)を渡り船を沈めて背水の陣を布いた

清康の叔父信定は胃を脱いで陣頭に立ち、清康、正悠も怯まず突進、白兵戦數刻、衆寡敵せず信成は柴の中春に討たれ、田次は大岡忠勝に殺された。新次のみ川を泳ぎ渡つて敗走した。清康は吉田川上流を押渡つて東門から入城、勝に乗じて田原の戸田憲光を降し、遂ひに東三河を平げ伊奈へ凱戦した。正悠は城中に迎へて祝宴を張る。宴酣のとき正悠の献じた盤中に三葉の葵が敷いてあるのを見て、清康が尋ねると「葵ヶ池に生じたもの」と答へたので清康はよろこび

「心地よや、立葵は正悠の紋所なり此の度の戦ひに正悠最初に参りて勝軍しつ吉例たまはらん」と云つてこれを自らの家の紋所とした。——徳川家三葉葵の起りと傳へられてゐる。

一方あやふく血路をひらいた新次は途中から引ッ返して吉田城内へ忍び込み日頃信仰の辨財天を懐いて赤岩山に逃れ、長榮阿闍梨に託して牛久保へ隠れたといふ、現在

豊橋市多米町赤岩山法言寺にある辨財天がそれで「今橋辨天」と呼び、新次は後に戸田左門と名乗つた。大垣戸田家の開祖であるといふ。

鐘のずらや

天念記念物として國寶の一つに算へられてゐる寶飯郡國府町國分寺の鐘を俗に「やらすの鐘」といふ。最初此の鐘の鑄造を國分寺から依頼されたのが當時京都に於ける鐘師として知られた京屋政右衛門であつた。三七日の精進、一心こめて作り上げたのを見ると、魂ともいふべき鏡に一脈のひびが入つてゐる。二度目にも失敗した。

「政右衛門に魔がさした」

彼は男泣きに泣き暮したが間もなく氣が觸れてしまつた。その後、國分寺の鐘は政右衛門と肩を並べてゐた鐘師京極道直によつて無事に納められ突ぞめの式も無事に済

んだ。それを見せつけられておさまらないのが政右衛門の長子政之丞であつた。彼は大力で有名だつた。「鍾に恨みは數々ござる」といふので國分寺へやつて來て鐘を引き降し、肩へ擔いで寺の門を出やうとした。すると、急に鐘が鳴り出した。

「コクブジコヒシ、コクブジコヒシ」

政之丞は夢から醒めた人のやうに鐘を再び鐘樓へ戻して立ち去つたといふ。「やらずの鐘」の起りである。

船井寺花寺井

大江定基が三河守に補せられ當國に下向した頃の事、豊川の里に數代續く豊かな長者が住んで居た。長者には船井、花井と呼ぶ二人の美しい娘があつた。

恰度國府の館に定基の着任したときは姉の船井が十七、妹の花井が十五、秋半だつた。長者は定基が長途の旅を無事に當國へ着いたといふので祝辭を

述べるため數名の雑仕を従へて國府の館へ伺候した定。基も非常に喜んで親しく膝を交へ雑談に刻を過ぎし手文庫のうちから叔母の赤染衛門から餞別に贈られた一本の扇子を取り出して見せたりした。扇面には

をしむとも なきもの

きけばたゝならぬかな

とあつた。長者は定基がさに似ず打溶けた應接ぶりが二人あつていま都ではや



ゆるにしかすがの わたりと
まだ廿歳をこしたばかりの若
にことごとく感服して是非豊
といつた、自分には年頃の娘
つてゐる「今様」の舞をさ、

しお目にかけてたい——と申し添へて歸つた。

船井、花井の姉妹は、それを長者の口から聞いて互に顔を見合はせた、不安と羞恥

が二人の胸をかきみだした。

本野ヶ原に秋が深くおとづれて来た、吾妻へ下る旅人の姿もばつたり絶へて片田舎にはなんの新しいたよりさへ聞くことができなくなつた、穂の峰嵐にさらさらと散る庭の落葉もさびしく搔葉をあつめてたく野火の煙が細く長く豊川の岸邊にたゆたふて野末の彼方に淡い夕陽が沈んでいつた……、姉妹はそれとはつひにはなかつたが國守の前へ出て互にひげをとるまいと寢食を忘れて「今様」の稽古をはげむのだつた。遠く國分寺の鐘を聞くと、そこには僅しか隔つてゐない國府の館が偲ばれた。襖繪に畫かれてある公達——そのどれが三河守さまに似てゐるだらうと幻を追つてうつとりとなる惱ましい日が姉妹の上に重つていつた。

最初はなんでもなかつた純な期待はやがて日のたつにつれ未だ見ぬ憧憬の人へのやるせない思慕の情と變つていつた。

×

父長者の話によると國守はその後氣分すぐれず館に引こもつてゐるとのことだつた姉妹は一人抱きしめた何もかを不意にもぎとられでもしたかのやうに落膽した。さうした悲しみのうちに長保辛丑の年はあはたしく暮れていつた。國府では舊臘中に竣成した船山館に政廳を移し、新館で年賀の禮を受けることゝなつた。元旦の朝長者は折目正しい直垂を着て國府へ參上した。式を終つて歸ると里の者らは續々と長者の家に詰かけた、年始の振る舞の出るのが慣例になつてゐたからである。

松の中はそんなことで常に子煩悩の長者も娘のことさへ忘れ勝に過ぎた。年中行事の中で最も重い白鳥總社の祈念祭にも參列した、また國府の「屋移の宴」にもよばれた、旅人のよく踏迷ふ本野ヶ原には新しい長者往還ができたとさへ噂される。

×

定基には平安の都にゐた當時深く契つた女があつた。定基はその戀人と三河國へ來る心算だつたが、女は都を下るのを厭ひ熱烈な定基の心にそむいた。長者は定基の憂

鬱性を失戀と望郷にあると斷じた。

「お前たちのうちで誰れでもよい、御館へ伺候して、御看病申しあげよ、然し國守はお前たち二人とも必らず御意に召すだらう」

姉妹は渡津の沖に出た漁師が隠れた月を見出したやうに喜んだ。

設樂の山奥から下つてくる川船がだらしなく眠つてゐる下男の舳のやうな艫音を立てる。廣庭の苔にも幾分づゝ緑の色が加へられた。然しまだ引馬野の海から眞一文字に吹きつける底冷の寒さは残つてゐた。猪を生けながらに下して神の贄にする渡津の庄の風祭りにも間がなかつた。

風邪の心地で寝ついた長者の病は次第に重るばかり、遙々使者を走らせて悲田院から取寄せた藥草も効能がなかつた。娘たちはまんじりともせぬ幾夜かを重ねていつた陰陽師を迎へて加治祈禱はおろか、砥鹿の社、石巻の社に代參を立てゝひたすら全快を祈つた。國守からは見舞ひの使者が來た。貴い煎藥も贈られたが矢張りむなしく梅

の蕾の開かうとする頃、長者は黄泉の客となつた。

x

船井、花井姉妹の悲しみは他の目にも哀れだつた。國守の心附で國分尼寺から尼僧が遣はされた。三七日の供養の濟んだ頃だつた。國府から來た者の話によると定基は宮路の庄長者彌太郎の娘で力壽とよぶみめうるはしい女を船山の館へ迎へたといふ事だつた。姉妹の更らでだに痛みやすい胸には又あらたな煩悶が加へられた。

「父さへ生きてゐてくれたならば」

事にあたり、物に觸れる度に姉妹はそれを互の口に歎いた。若い女許りでは——とあつて父の弟に當る人が姉妹の家に同居してからはそれまで家一杯にのばされてゐた彼女らの翼は少しづゝ切り縮められていつた。その上叔父と一緒に入つて來た従兄弟たちは亂暴で野鄙で人の道さへ知らぬやからだつた、伯母さんと呼ばれる人も邪見な性質だつたので、古くゐた召使の大部分は解雇されてしまはねばならなかつた。姉妹

は人知れず孤獨薄倖を泣いた。

從兄弟たちは交る／＼卑しい事を挑まうとした。姉妹の反抗心は恰度豊川の水に逆らう上潮のやうにそこへ小の耳へ更に悲しむべき事件だった。定基の愛妾力壽がの志をいだいて近く平安妹はたけなす黒髪をぶつつそして姉と妹は別れ／＼に豊川の岸へ小さな庵を結び、心道堅固な生涯を送つた。姉の庵を船井寺と呼び今は庵跡を止めるに過ぎないが、やはりその名のまゝを呼ぶ妹の花井寺は豊川町三明寺際に現存してゐる。



さな波を立てはじめた。姉妹の報せられたのは翌年のこと病死し、定基は一念發起遁世の都へ歸るとの噂だつた。姉りと根元から斬り落とした。

石籠女

熱心凝つて石になつたと傳へられてゐる。

寶飯郡赤坂町大字西裏の長福寺にある。

大江定基の三河守時代、赤坂長者宮路彌太郎の娘力壽は定基の愛を得たが定基が任滿ちて都へ歸るとき、悲しみのあまり舌を噛み切つて死んだ、その

川尻婆アの古提灯

「川尻婆アの古提灯」——大恩寺山の古刹龍光寺がまださかえてゐた頃のはなし。

萍野に數代つゞく長者が住んでゐた。萍野小町と評判されたその長者の一入娘が、相手はわからない(一説には渥美太夫源國重を戀したのだともいふ)届かぬ戀にやせる身を乙女心の初一念、夜毎此の龍光寺へ忍び運んで、冷めたい深夜の拜殿へぬかづくのを、誰が見たか、里人たちの噂に上つて間もなく、娘は氣が狂つて座敷牢のうちで悶へ死に死んでしまつた。それから毎夜

龍光寺の杉の木に怪し火が燃へ出した。里人たちは娘の怨霊だといつておそれ、或る者は娘の靈を慰めるため龍宮から燈明があがるのだとも噂した。それかあらぬか大恩寺山の頂に燃へる怪し火はきまつて「むらさき川」を南へ走り海の彼方へ飛去つてゆく。

たきどりの里人が夕刻

した恐ろしい顔の老婆に會
ぼつてゆくのを見た、ふり

といひ、まだ生きてゐるの

野小町と結び考へて今更のやうに肌を沫立てるのだつた。……それから云ひつたへる

「川尻婆アの古提灯」なのだが、下手に茶化さうものなら古老などは「此の目で見た

」と怪し火の實在を力説する。雨のぼしよ〜降る夜など、此の話をもちだすと土地



龍光寺の門前で、髪をふり亂

つたと云ひ、麓の岩をよぢの

向いた口が耳まで裂けてゐた

ではないかと、戀に死んだ萍

の女子供は一縮みにふるひあがつてしまふ。ちよつと構成に無理はあるが、傳説としていさゝか風趣がないでもない。萍野長者の墓はいまなほ萍野（泣き野）に残つてゐる。

松の衣羽

天女が羽衣を松にかけたまゝ水浴してゐたため、その羽衣を漁師に拾はれてしまつたといふ傳説は随分各地方にあるが、そのうちで最も有力なのは駿河の三保の松原と近江の余吾の湖である。物語りは半まで何れも同一だが、寶飯郡牛久保町にある羽衣の松の傳説は後半が變つてゐる。

牛久保町に屬する字行明はその昔この一帯を星野の里と呼び、大きな池があつた。これを星野の池といひ、池の附近を皎月野と稱して風光頗る明媚であつたといふ。

今は僅に池の跡かと思はれるものが遺つてゐるだけで、羽衣をかけたといふ松も枯

れて、二代目の松が植られてゐる。この地點は大字瀬木の防波堤の東の畑に當つてゐる。

さて、前にも述べた通りこの傳説によるも羽衣を拾はれ、それを天女が奪ひ戻さうといふので下界へくだり漁師の妻になるところまではみんな大同小異であるが、この由來はそれから少し異つてゐて面白い。矢はり余吾湖と同じやうに一子をまうけて後、漸く羽衣を漁師の手から奪ひ返して天に昇つたがその際天女は下界へのこしゆくわが兒に

「われなき後は片親と思へ、これを汝につかはす」

とて茶の實を與へた。ところが程經てその茶の生へたのを見ると不思議にもその葉が片方ばかりに出る。里人呼んで片葉の茶と傳へ、爾來遠近よりこれを見にくるものがある。

x

見物人のために附近の畑が踏荒されて困るといふのでこの茶の木を傍らの寺中に移植した。め年經す枯死してしまつたとか。それを古老は實際に見てゐるといふから八九十年前までは實在してゐたらしい、また天女が天界へ翔け去るとき

「われ螢となりて夜毎來たらん」

といひのこした、土地の人々は大きな螢を目にする度にこれをギョウメンジ螢と呼び天人の螢として最大の敬意を表してゐる。

そして天人がその愛兒のために作つたといふ人形が今日なほ大切に保存されてゐる。この人形は白の手織木綿でできたク、リ猿で、あるとき人形が古くなつたからとて豊川に流したところ、一夜家人は人形が河からあがり蜜柑の木の根に來てさめく泣いてゐる夢を見て驚き、ふたゝびひろひあげて箱へ納め毎年一枚づつ白木綿の衣服を新調して着せたといふ。

今着てゐるものは當主牛久保町字行明平尾九三次氏の祖母が作つたといふ粗末な白

の手掛木綿だが如何にも當時の物らしい。物語りに現れたこの天女の生んだ兒が御三家三勇士で名高い彼の三十三間堂矢通しの記録をつくつた星野勘左衛門であるといふ

橋がだ子

寶飯郡小坂井町字走川と八幡田との境界をなす東海道に「子だか橋」或は「子断橋」と呼ぶ小橋があつた、いまは僅にそれと思はれる土橋の跡をどゞめてゐるに過ぎないが、小坂井町縣社菟足神社に人身御供の行はれた時代のことであるからずつと大昔のことである、宮の例祭日は四月十、十一日で、これは今日も變りはない。

毎年贄符奉仕といつて番に當る二人の村人が祭の前夜即ち四月十日の午前零時を期して小坂井と下五井の間の橋に立つ、そしてこゝを最初通行した女を神の犠牲として宮の祭壇に供へる、それが里のいまわしき慣例となつてゐた。

x

里のうちに佗しい一人暮しをしてゐる老人があつた。老人は今橋(豊橋)のさる武家の邸へ奉公に上げてある娘の歸るのをたゞ一つの楽しみとしてさびしい生活を慰めてゐた、その娘がめでたく奉公を終へ老人の許へ歸らうといふ或る年の事であつた。娘の居る邸に腹黒の下僕がゐて、これが屢々娘へあるまじき事をいひ挑み操固い娘のこれに應じないのを恨み憤り

「其女の里の宮の祭は今年より一日おそく行はれる事になつた故こころして歸らねばならぬぞ」

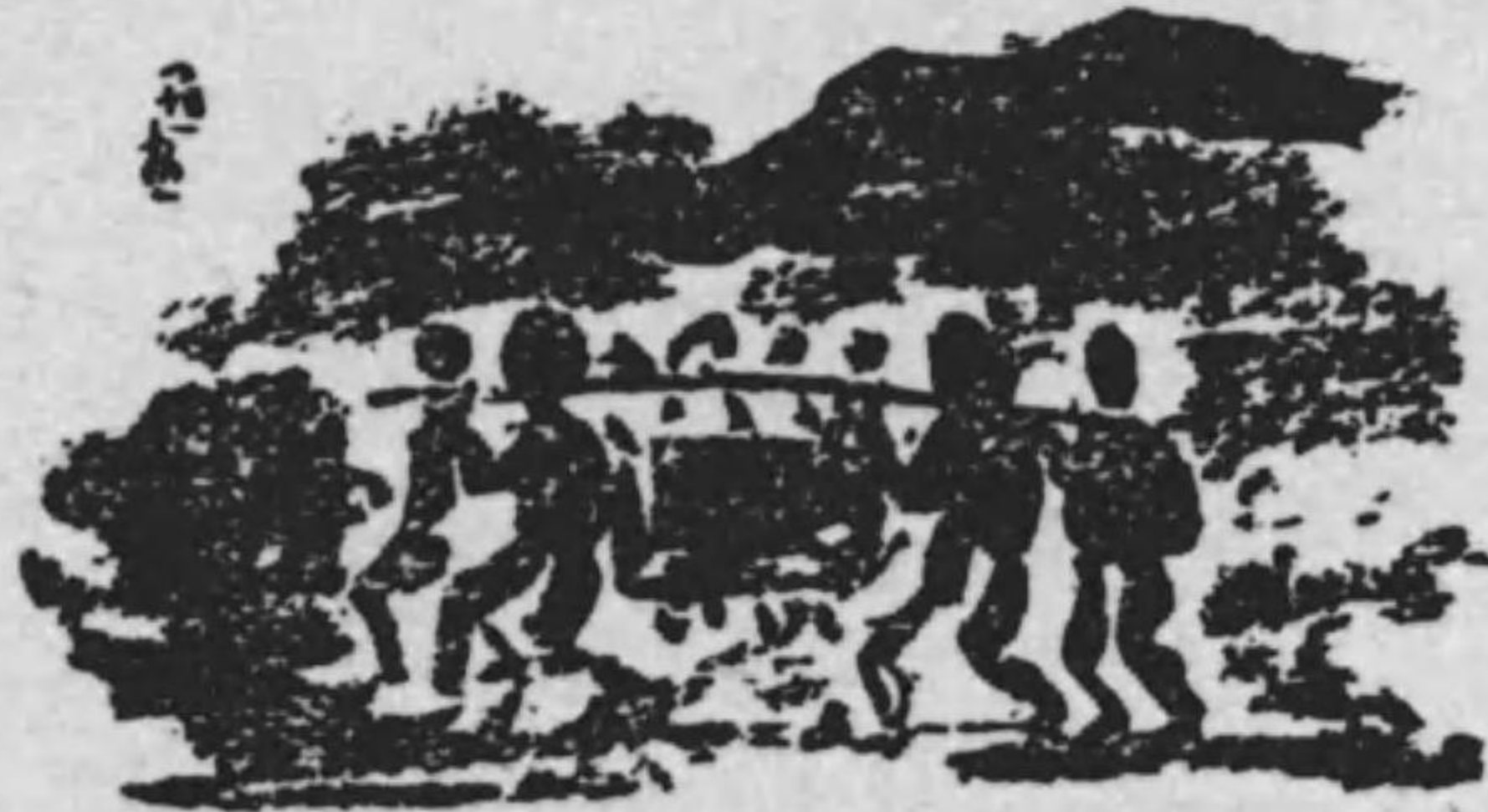
と言葉巧に偽はり、そして娘が邸にをられないやうな策謀を廻らした。娘は、あの恐ろしい人選みが一日おそく行はれるといふ男の言葉を信じ、邸を免れて、父待つわが家へ夜道を急いだ、娘の父親がその年に贄符に選まれてゐたのだ。

老人は娘を一目してそれをわが子と見ると、氣も狂はんばかりだつた、が里の慣例を破り、多くの村人に難儀をかける事はできなかつた、絶りついて哀れを乞ふ娘を縛

めて箱に押籠め里人たちの力をかりて宮へ運んだ、祭が済まぬうちに老人の姿は里から消えた。

村人たちが怪しんで、今橋の奉公してゐる筈の娘も邸には居体が豊川の岸に打ちあげられたがあつてそれを「高橋」と稱し「小高橋」といつてゐたと云ふ。

老人の哀切極りない氣持ちをの「子だが橋」或は「子断橋」の肉を食してゐたのは宮に棲む狒々であつて、後に一人の武士が犬を伴ひこれを退治に來て狒々を仕逐めたが、その時愛犬を彼の牙にかけてしまつた。その犬は今日豊橋



娘の居る邸を訪ねたが老人は勿論ぬといふ、數日して、老人の溺死橋の東にそれよりは稍や大きな橋人選みをしたこの橋を小さいから

傳へ自來それを子であつたが——

と呼ぶやうになつた、年若い女性

市牟呂町の専願寺に祀られてゐる。

馬方辨天

寶飯郡豊川町の三明寺は、文武天皇の大寶年間御願によつて創立せられたもので辨財天の本尊は大江定基が三河の國司であつたときその妾力壽の死を悼み自ら刻んで奉納したものである。又境内の三重の塔は後醍醐天皇の第十皇子無文禪師の建立せられたもので史蹟名勝天然記念物に指定されてゐる。辨財天は俗に馬方辨天とよばれ、競馬師や曲馬師、さては伯樂、馬方といふ手合に信仰者の多いのが面白い。

明るい夜だつた、月見草も咲いてゐたに違ひない。豊川堤を、シャンコ〜と來かゝつた馬方、節は追分、のどがよかつた。その妙な唄聲は三明寺の辨天様をうツとりとさせずにはおかなかつた、辨天様はもう堪らなくなつて、その馬方を呼び若干の鳥

目をいれた財布を與へた。そして

「これはお錢の限りなく湧き出る財布ですが、私から貰つたと他言してはなりませんよ、もし誓ひを破るやうなことになりますたら財布は空になりますよ」

とかたくく口止めした。辨天様にも花恥かしい乙女心があつたのであらう。とにかく馬方は辨天様の美しい手から寶の財布をおしいたゞきぞくくしながら無我無中で禮を述べ、前よりも一層聲を張りあげて唄ひながら家へ歸つた。

馬方は辨財天との誓ひを守つて決して他へこれを洩らさなかつた。彼は日夜酒と博奕とに多くの金を費したが、かつて財布の欠乏を見た事がない。その財布には常に初めの額があつた。人々はこの馬方の財布を怪しみ妬んでいろく質ねたが、馬方は曖昧に言葉を濁してゐた。

x

だが、思ふことをいはずにゐることはむづかしい、ましてその幸福においてをやだ

馬方の秘密は時に出口を求めて咽喉まで込みあげてくる。つひに彼は酔ひにまぎれてその秘密を話した。

「辨天様に惚れられた果報者はおれた、この財布は辨天様からの贈りものだ」
同時に彼の財布は空になつてしまつてゐた。

それから誰いふとなく三明寺の辨天に「馬方辨天」の名をきせた、そして月に一度境内の辨天池の水が赤くなる、辨天様の月のものだといふやうになつた、この池水の時に赤く見えるのはアミーバーの雲生するためだともいふ、何はともあれ馬方辨天の由來をとけば尊い辨天様の容姿がくだつて馬方冥利が盡きはせぬかと思はれるが傳へられるものはこれである。

淵ヶ鞘

蒲郡町字大坪天神社の境内にある。天正年間、清田山から東海道に通ずる中路に椿澤といふところがあつて年古くから大蛇棲み通行人を悩ましたとい

ふ。
 偶々、浪士牧野九郎義房なる者、これを聞いて憤激し、諸人のために此の大蛇を退治した。時に黒雲垂れ暴風起り豪雨しきりに襲つたが間もなく止んだ。翌朝義房の紛失した鞆が、此處に流れついてゐたので以來「鞆ヶ淵」或ひは「九郎三ヶ淵」と云ふ。

祭じうごなう

牛久保の里の商ひ市がさかんな頃の話。

七日目毎に立つ此の市へ、どこからくるか大きな瓢箪をさげた白髪白髯の老人がきまつて現はれ、何を買はうとするでもなく、賑はう人波に揉まれてゐるのを見るが、いつ消へてなくなるのか、市のひける頃にはもう見えなくなつてゐる。里人たちは不思議な老人としていつも噂をした。

「仙人に違ひない、近よつて粗相をするな」

人々がさういつていましめ合ふうちにたゞ一人「あの乞食おやじが仙人だなどと、

馬鹿な事があるものか」と力んだのが、里で無頼の嫌はれ者だつた。

老人の腰から瓢箪を奪ひとつて、からかひ半分里人たちの面前でうちこはした。既に老人の姿はなかつた。おそれながらも里人たちは碎かれた瓢へ好奇の眼を瞪る。……と中から出て来たのは酒ではなく、幾百千とも知れぬウナゴウジ（蛆）だ。無頼漢はその夜のうちに行方不明となり、次ぎの市日を待つても、もう老人の姿を再び迎へる事は出来なかつた。

「今まで市のさかえたのは仙人のお蔭だ。ゆくすえどんな凶事があるかも知れない早くお詫びにお祭りしろ」

これが寶飯郡牛久保町で毎年四月七、八の兩日行はれる東三の奇祭「ウナゴウジ祭り」の起りであると傳へられてゐる。

犬頭靈神

犬頭系の傳説は三河國に二つある、一つは西三河の六ツ美村に、いま一つは東三河の千兩村にある。わが國に養蠶が行はれて間がなくまだ秩序立つた飼育法も繰糸法も行はれなかつた未開時代のことである。

三河國を司ぐる門野經時は正妻と愛妾とを同居させて、その二人に養蠶をいとなませてゐた。ところが奇怪なことには正妻の養つてゐる蠶は、いざ上簇といふ頃になると例年きまつて病を出しそれがことごとく死んでしまふ。

青白い謎の死——正妻はさうした自分の失敗によつて日毎夫の愛が妾の方へ傾いてゆくことを悲しんだ。それに引かへ愛妾の手に飼育されてゐる蠶はいつでも順調に發育して立派な繭をつくつた。

經時は、正妻がこの見苦しい失敗を繰返す事を當人の不誠實からであると、なして罵り責めた、蠶が死ぬといふ事實の前には如何ともするすべがなかつた。正妻はつひに追はれ、愛犬源九郎と従者數名を伴つて國府の館から程遠からぬところにわびしい假

りの住居をいとなんだ。

ある朝、新緑したる若葉の蔭に不思議な虫を發見した、正妻はそれが蠶であることを知るとこの蠶ゆえにこ

自分の上を、われとわが心まりの可憐さにふたゝび飼
「必ず無事に成長してく
と自分の手によつて養ふ
數日後、彼女は縁側に蠶



そ今日の悲しい運命にあるにさびしく問ひながら、あふまいと誓つたそれを
「れますやうに」
事にした。

んでゐた。それをぢつと見てゐた源九郎は、なにを感じたのか突然縁へかけあがつてその蠶を一のみにしてしまつたのである。やがて愛犬の鼻吼から一條の白糸がひらひらと舞出てゐるのを見た。彼女はこの奇怪な絹糸をいぶかりながら犬の鼻からその糸

を引出した。糸は容易に盡きさうにも思へないので、これを糸棒にまき取ると、驚くべし、實に五百餘棒に達したが糸が終ると愛犬は血を吐いて死んでしまった。

彼女は愛犬の死を深くいたみ、桑の木の下へねんごろに葬った。

その後経時がたま／＼正妻の家をおとづれ、彼女の手によつて作られてゐる糸を見て、それが愛妾を始め他の人々の作つてゐるやうな色の黒い節の多いものとは全然異つて驚くべき立派なものである事を知り、その事情を聞いて彼女の誠實を始めて知つた。

愛妾が経時の寵をひとり得んために毒物の實を投じ正妻の鬘を殺してゐた事も暴露した。経時は己が非をくひ、妻の功を賞して妾を追ひ正妻の手によつて作られた糸を犬頭糸と命名して年々朝廷へ献上した。犬頭靈神をまつる實飯郡八幡村千兩犬頭神社の由來である。

わくくり様

千年も昔の事である。三河國のある一部落を取締つて豪奢な生活をいと楽しんでゐる會長があつた。

生れる子も生れる子もみな男ばかりで、女の子の一人位は欲しいものだと希つてゐた會長の家にひよつこりと女の子の生れたのは七人目だつた。玉耶經に記されてある女性の十惡も彼にとつてはなんの意義も認められなかつた。會長は部落の人々を招いて盛大な祝宴を催し、部落民からの心をこめた祝物を受けたさうした喜びのうちに育まれた女の子は、いつしか大寶令で定められてゐる婚期十三歳の春を迎へ、隣國のさる豪族の許へといつた。

ところがどういふものか女には子供ができなかつた。楽しい新婚の第一年も夢のやうに過ぎ、二年目もはななくれて、第三年を迎へたが依然として祝ふべき兆は見られなかつた。婚姻三年にして子なきときは速かに離婚すべしといふ約束があつた。女の失望、會長の落膽、部落民の悲嘆——會長や部落民は世繼の一日も早く生れ出でん

事を祈つた。

x

やがて祝福の日はおとづれた。がその喜びはやがてふたゝび苦惱と變つた。女にのみ與へられた産の苦しみ。殊に婚姻後年を隔つての懷妊である。よしそれに耐へ得るとしても萬一難産で子供を死なしたら——といふ不安があつた。古老は三河國のワクグリ神社の靈顯いや多きをとき同社へ願をかける事を進言した。夫婦は喜び勇んで家來を従へ嶮しい山坂を越えワクグリ神社へ參籠して三七の間祈願を凝めた。

月満ちて安々と生れたのは玉のやうな男子だつた。酋長はこれを靈顯いやちこなワクグリ様の加護によるものとなし、一番上等の絹糸をわくにまき御禮として神前に供へた。産の神様として尊まれ出したのはそれからで、今日なほ懷妊女の參詣が見受けられる。

x

——ところが同社の祭神は蠶業の元祖保養神で、事實附近には蛹を埋て供養した蠶塚なるものも現存し、養蠶の神様としてひろく知られてゐる。これはいつかの時代において「お蠶」と「お産」が誤り傳へられたものであらう。豊川鐵道東上驛の近くにある養蠶の神様ワクグリ神社の傳説はまだ他にもいろいろある。

螺 紅 口

竹谷（寶飯郡鹽津村）の城主松平清善が徳川家康の後援を得て今川方に屬してゐた上ノ郷の城を攻め落したのは永録六年。今から三百七十年程前の事である。

上ノ郷の城主は鶴殿長照で討死したが、美しい姉妹の姫は父の戦死を知つて城を逃れた。然し、追求きびしく姉妹は戀の松原から海に身を投げて父のあとを追つた。鹽津村竹谷の海（戀の松原）の螺が口紅色をしてゐるのは最後まで女のたしなみを忘れなかつた姫たちの名残りであらうと傳へられる。

松 夫 女

蒲郡町大字五井字岡海道村社八幡社の境内にあり、周圍約七尺の松の木である。

天正六年九月徳川家康は異父妹である天桂院が五井城主松平立藩頭家清（太郎左衛門）に嫁した際縁深かれと八幡社へ祈願し、記念のため植えた、それが此の松で、不思議にも地上三尺の所から男松女松の二幹に分れ共に樹勢旺盛である。

社 神 坂 逢

八名郡金澤村に相對して親子のやうな山がある。形のよく似てゐるところから大きな方を俗に三河富士ともいふが、此の二つを稱して大照山、小照山と呼び、その中間に逢坂神社がある。

昔、大照山と小照山双方から夜毎怪し火が燃え出し、山間の坂で一つになつては消へた。里人たちは不思議に思ひ、おそれながらも勇敢な一人が、深夜の坂に

忍んでゐると、恰も親子の語らく聞こえて来たといふ。純朴な靈火の落合ふ坂の中途へ社を建

梅のずらな

善福寺境内に現存してゐる。

寶飯郡小坂井町平井陀如來、創立は文和二るとき此處で蹴毬の遊梅の實が悉く地に落



うやうな話し聲がどこからともな里人たちは山の靈に違ひないと、た。これが逢坂神社である。

善福寺は龍華山と號し本尊は阿彌年である。往昔兎足上足尼命があ戲に興せられた。その毬が當つてちてしまつた。命薨去の後は不思議

石卷山

石卷山と本宮山が背較べをして石卷山が負けた。以來石卷山へ詣るには石一つでも持つてあがれ、すると身体が疲れないといはれてゐる。

石卷山を神山といひ、その山麓に丹波士族の大三輪氏が勢力を張つてゐた。これに對抗して片方本宮山は同じ丹波士族の穂別君の治所で更に壓倒的な勢力を有してゐたため此の同族は川を挟んで常に血の争ひを續けてゐたといふ。これが石卷、本宮の背較べ説の起りだとも傳へられてゐる。

石き抱子

八名郡山吉田村から東方一里の阿寺山中、大小の飛泉が七段に落ち、その瀧壺は底知れずといはれてゐる。阿寺の七瀧と稱び、小石を抱く數多の石がある。

昔、此の附近に住む豪家に嫁いぢめする姑があつて、子供のないのに難癖つけ、さかんに嫁いびりをした。息子もうすくは知つてゐたが、温和な性質だつ

たので、母を一度咎めるでもなく、蔭へ廻つて嫁を慰めてゐた。三年経つても夫婦の間にはまだ子供が出来ない。嫁女は毎日阿寺の山へ忍び、瀧にうたれて祈願した。さうして不思議にも子供はさづかつたが意地悪い姑は飽まで、彼女に辛く當つた。禮詣りのため子供を抱き紙



まだ癒り切らない身体をあとをつけて來た姑は共瀧壺へ突き落した。さたが、その夜のうちに老に引裂かれ、寢所のうちつてゐた。

緒の草履をはいて嫁女が岩の上まで運んだとき、矢庭にうしろから子供諸うして何喰はぬ顔で歸つ婆は何者とも知れぬものでむごたらしい死骸とな

無情な姑のために非業の死を遂げた母子の恨みは長く石にのこり、子供は授けるけれど紙緒草履をかたく禁じ冒せば必らず崇るといふ。今でも「紙緒草履をはいて詣

ればヒンメ女郎に奪られる」といしましめ傳へられてゐる。

淵ケ鐘

八名郡賀茂村の和里淵を鐘ケ淵と稱んでゐる。昔、賀茂村長者の娘が川を隔てた寶飯郡麻生田村のさる屋敷にかくまはれてゐた年若く美しい武士に遣瀨ない思ひを焦がし、若者が石巻の社などへ參詣する途などに忍んで、苦ししい胸のうちを訴へたが、若者はいつもさりげなく装つて、彼女に満足をあたへなかつた。

冷めたく扱はるればそれだけに思ひの募るが人情、悶々の日夜を過ごしたある夕刻石巻詣での歸途を待ち受けた娘が、男の袖へ絶つてこれを最期と涙まじりに掻き口説いた。その熱心に動かされたのか、それとも、出来ぬ難題に事よせて思ひ諦めさせやうといふ心か、若者は

「そもどこにそれほどの誠があるなら、權現山の鐘をわしの許までもつておぢやれ、

鐘と共に、そなたを妻に迎へやうぞ」

と云ひ残して去つていつた。乙女心の初一念、娘はそのまゝ、權現山へかけのぼつて鐘をひき降ろし、どうして運んだか和里淵までもつて來た。魔の棲むと云ひ傳へる深淵も娘にとつては小川の淺瀬とも見へたであらう。娘は鐘と共に川底深く沈んだまゝ、再び姿を現はさなかつた。その後村人たちが手を盡して川底を探したが娘の死骸も鐘もあがらない。今もなほ鐘は沈んでゐるといひ、戀に死んだ娘の恨みが、かたく鐘を抱きしめてゐて離さぬと傳へられる。

かめたの祭

享保の印本「濱の眞砂」に、三河八名郡石巻神社の池にコノシロ多しと出てゐる。又、高力種談の本衍便覽にも「吉田と二川の間から石巻山に多くの穴のあるのが見へるが、そこにコノシロがある。コノシロは石巻神社のつかはしめである」といふやうな事が記してある。

吉田城と、多米峠と、此の石巻山はその位置が恰も五徳の脚のやうになつてゐる。吉田城では敵の攻撃を受けた場合石巻山から砲弾を見舞れる事を最もおそれ、若し敵石巻山に陣をとらば、われ多米峠に設へて敵を粉碎せん——さういふ心算で、多米峠へ煙硝倉を置いたものだからかも知れない。とにかく城主は代々、石巻山へコノシロを奉つてゐた。つまり「かため、(堅め)の、コノシロ、(此城)」である。

もう一つ面白いのは豊川の城下に「片身の鱧」が野主になつてゐるといふ傳説である。(かため)の、コノシロ、カタミの、ス、キ、これも勿論「堅めの、コノシロ」の語から轉化したもの、最初の、石巻山、コノシロ存在説の如きも矢張り、吉田城から献上したコノシロを、誤傳したものではなからうか、対象していさゝかユウモラスだ。蛇足ながら一寸特筆した。

淵ラケイカ

八名郡八名村一鍛田の豊川流域。底が龍宮に續いてゐたと云はれ、村に慶事のあつた場合こゝへ祈願を籠めると、同村山本利平次氏方へ必要の膳椀が現はれる。村人は使用後、淵へ沈める事になつてゐたといふ。膳椀の出たといふ山本家の座敷は轉築現在豊橋市西新町藤田家の裏座敷になつてゐる。

池ケロ三

八名郡石巻
底は天龍川に
村の親子三人
あると、大蛇
うとしたので、父親と
ズタ／＼に斬つて助け
主の雄龍で、残つた雌



村大字金田村三口ケ池の續いてゐるといふ。昔、が池の附近で草を刈つてが現はれ小さい弟を呑ま兄が駆けつけ鎌で大蛇をた。殺されたのは池の野龍は恨みを遺して天龍川

へ去つたといふ。

明治の初年金田村の三四人が秋葉山へ詣つた歸途、船が覆つて天龍川雲名の渡船で溺死した。以來金田の者と云へば、天龍下りは勿論、雲名の渡船も渡してくれない。事實秋葉山詣りはしても決して金田村を口にしない、すれば雌龍が崇ると云ふ。

おからす様

渥美郡福江町大字保美の靈山寺にある。「おからす様」といつて女の月の病を癒すといはれひろく信仰されてゐる。
應仁元年、鳥丸大納言（資任卿）が京師の亂をのがれて所領地の伊良湖へ來た。非常に美男で、都にゐるうち、數多の艶聞を流したが、さうした事から敵も多く、愛慾流轉、つひに都落ちして豊島ヶ池の北に住み、悟りをひらいて文正二年九月剃髮し持佛閣浮檀金の觀音像を保美の靈山寺へ納めた。俗にいふ「おからす様」で此の觀音様へ詣ると婦人病に靈驗があるばかりか、月一度の生理的現象を、思ふ日まで先へ送る事が出来ると傳へられ、昔から女の伊勢詣りに調法がられてゐる。

x

明治三十二年頃、賊が寺の床下を線香で焼切り、此のおからす様を盗み出し、佛像を三ツに切つて賣り飛ばした、苦心の末三ツ切りの二つだけ探し戻したが肝心の首がない。已むを得ず、小さく鑄なほして現在に至つたが靈驗いやちこで參詣者が絶へない。お禮詣りには赤い紙を奉納する。資任卿の墓もまだ残つてゐる。

石鵲鸚

渥美太夫源國重が三河の南海越戸で狩鞍を行つたその歸途、高根山の谷間で縹緞うるはしき娘の櫻を手折らんとしてゐるのを見ていぶかり何者かと問ふに
「妾はこの濱邊にすむ漁師の娘なるが、おさなき時父に別れ母と二人暮し

あるうち先頃母も病死し明日は母のたいや故、この花とりて参らせんとこれまで参りたるが家へ歸るも兩親なく、たよるものもなければ何卒御供に召つれ給はるべし如何なる御奉公にも堪ゆべし」

と涙ながらに答へたので太夫はいとゞ不憫に思ひそのまゝ、館へつれ戻つた、時に太夫二十八歳、娘の名を八重壽と改め妻とした。

x

この八重壽は高根山の谷底にすむ大蛇で、猪狩に追はれ棲場をかへんものと逃げ惑ふうち太夫の目についたのでやむなく人体に變じ太夫を偽つたものである。

三年の後八重壽は太夫のたねを宿し月重なつて天平二十年戊子八月、玉のやうな女兒を生んでこれを玉榮と名づけた、玉榮が十七歳となつたとき、太夫は初徳和泉といふ士の弟主馬之助を尊として取りきめた。その年の大晦日、太夫が娘玉榮を同道して山田觀世音に参詣した間のできごとだつた。

丁度暮六ツ、八重壽一人家にあると、大兵な男が刀を携へ押入り浪藉せんとしたので、八重壽は薙刀をとつてこれを斬り倒してしまつた。疲れ伏してゐるところへ立戻つた渥美太夫と玉榮が、八重壽の蛇体であることを知つたが、何氣なくたづねると「今日ごこの人かは知らねども御前様の留守を考へ妾を女どあなごり手込にして金を借らんとせし浪藉者の來たりしたため我が氣量にて手にかけてしが妾事もはや御側にはべる事もかなはざれば今日限り御暇賜はれかし」

といふ。

「浪藉者を手にかけてしはそなたの手柄なるに暇くれとは如何なる事や」

知らぬ態で反問すれば八重壽は涙ながらに自分は高根山の谷にすむ大蛇であると語つた。

x

太夫はうなづいて

「いつぞや高根山の猪狩の折そなたを見初め迎へてわが妻とせしがさては人間にてはあらざりしか、何れなりともそなたの心にまかすべし」

と云つて妻の身を悲しんだ。八重壽は自分の膝にすがつて泣きむせんでゐる我が子を、しつかりと抱きしめてゐたが、やがて玉榮をいたはり起し錦の袋に入れた横笛を取り出し



渡りし唐竹の横笛、之をもときは又逢ふべきに、この

笛を母と思ふべし」
とて、これを玉榮に手渡した。

渥美殿の許から去つた八重壽はもとの大蛇に姿を戻し二里ばかり隔たる龜山といふところにある周圍十五、六町の沼へ入り野主となつた。

長澤村の獵師は、その去りゆく物恐ろしい姿を窓から目撃して發熱、盲目になつたといひ、爾來今日に至るまで村人たちが大蛇の通つた路に面する北側へ窓をつくらぬのは大蛇の崇りをおそれるからだと云はれてゐる。この沼のうちには多くの島があつて、人呼んで十島ヶ池といつた。

八重壽のこの沼に入つた夜大雨があつて嵐となつたが、一夜あくれば晴天となり、家の棟、田畑などに泥二、三寸も積つてゐて、如何なることかと里人たちがこの沼を見るに、今まで泥沼だつたのが清水となり、島などもなくなつてゐたので、この池に野主が止まつたのに違ひないと池の東方を池の神と名づけ、毎年大晦日をもつてこの池の神祭りと定めるやうになつた。

さるほどに渥美殿の娘玉榮は父のとりきめた主馬之助を夫に定め、たまの面會にも

胸とゞろかせ夫よ、妻よ、と呼び呼ばるゝ日を指折かぞへて待ちこがれてゐたが、主馬之助はその後六所の神主の娘貞女といふ女に慕はれ、端たない噂となつた。これを玉榮が耳にして、女心の一念に主馬之助が心變りしたものと恨み、うつうつとして日を樂しまず、一方主馬之助に戀をしむけた貞女は、彼が自分になびかぬのを玉榮ある故とこれも恨み、一日主馬之助の許をおとづれ

「玉榮様の母君は人にあらず、まこと大蛇の化身なりしに斯様なものゝ生みたる女と縁組いたさば如何なる大事出来せんもはかりがたし、かやうなものは一日も早く見すて妾をいたはり給はれかし」

と搔口説いたので流石の主馬之助も驚きその後は玉榮より訪れる文は開きもせず貞女と内縁を結んでしまつた。

玉榮はある日使ひに來た下僕のを唆かして主馬之助の事を聞いた、心なき下僕は貞女を迎へ入れた事を語り睦まじく暮してゐる旨を告げた。玉榮はかつと憤り

「親と親とが結び名付けしに他の女と縁組なせしは妾をなきものにいたせしなり、主馬之助様に參り妾が夫となさん」

とて色をなし立上つたので従者等がこれを押とゞめたが更に聞き入れる様子もない下僕のもの驚いて、如何なる口論出来せんも知れずと先き廻りをして主馬之助にかくと告げた。折柄貞女と共に酒宴を催してゐた主馬之助は狼狽し、家臣のものに意を含めて貞女を伴つて裏口から館を逃れた。そこへ玉榮が裾もあらはに髪ふり亂し狂氣のやうに駆つけて來た。

x

留守をあづかる下女は玉榮の取亂した様子におどろしなから、主馬之助から含められたまゝ、主人は貞女様を伴つて山田の觀世音へ御參詣のため御立出で遊ばされたといつはつた。

玉榮はそれを誠と信じ、那草山の裏道を傳つて觀音まで駆けつけたが主馬之助たち

の姿はない、掃除をしてゐたものにたづねたが左様な方はござらぬといふ。さては——と感ずるものゝあつた玉榮は、直ぐに道を引返しはじめたが、その途中に主馬之助と貞女のゆくの見出し、あの坂を上りこの坂を下り、二人の後を追ひかけた。雨はぼそくとふりだすし、日もめそそくとくれ初めてゆく。二人の姿を見失つてしまつた玉榮は、とある岩の上へ崩れるやうに身を投げだした。死——それより他に道はなかつた。玉榮は懐刀をさぐつたが、どこへ失つたか身にはなかつた。思ひ出したのが母より與へられた唐竹の横笛である。ぐさと咽喉へ突立てた。

雨はいよ／＼はげしく風さへ加はつて嵐となつた。一方主馬之助と貞女は玉榮が那草山の太岩から身を投げて死んだと聞き、さすがに面白からず二人とも病に憑かれて床に伏したが、そのまゝ癒へず百日程患つて黄泉の客となつた——時に天平神護元年巳三月。玉榮女は夫と思ひし主馬之助を他の女に奪はれし口惜しさに那草山の露と消えたれ毎夜々々その岩の下より怪し火となつて燃え出で主馬之助の邸に通つた。

人々はこれを見、又主馬之助、貞女の死にあたり、玉榮の恨みを懼れて岩の附近へ行くものなし。泉福寺の住職これ聞いて玉榮の靈未だ成佛なりがたしとて大施餓鬼を供養した後は怪し火の噂も絶へた。

ある日子供らが三、四人、岩の近くに至つて、こゝにて玉榮女生命を捨てしなど、噂すれば、言葉岩にうつり出でたので驚いて逃げ歸つた。それ以來いつとはなしに玉榮女の靈魂がこの岩にとゞまつたのであらうと傳へられるやうになつた。

三味線、太鼓などがひびき傳ふにたゞ一つ横笛だけがひびかない……渥美郡泉村鵜鷺石の由來である。

石りくほ

人皇四十二代文武天皇の皇子に武見親王と申される御方がおはしました。親王には慶雲三年、その長臣長日子、出日子の二人と共に勅勤を蒙らせられ九重の都をあとにして鄙の三河に下向された。出日子ひそかに同志の者に語

らひ随従の士を募る、參ずるもの忽ち四十余人に及んだので先づ伊勢路に出で、神社の湊に憩ひて海路を三河に向はれた。船中波穩やかに事なく渥美の郡の高石（高師）の濱大津（老津）の岸につきたまふ。八名の郡は父帝の有縁の地にもあればとて石巻山へ向ふべく大津村の七兵衛といふ者に案内を申付けた。七兵衛はこれによつて後「伴」を苗字にしたといふ。乗捨てたまふた御船は海底に沈んで石と化し、御履物もまた石となつた。

此の御履物が、今残る木履石（ぼくり石）である。舊三月三日頃の汐のよくひく時でないと思へない。

久丸様

「久丸様」は南朝時代の高位のお方であつたといふ。敗戦して、此の神戸へ流刑された。

最初久丸様は伊良湖岬村小塩津へ上陸し、間もなく泉村江比間へ移り、最

後に神戸へ隠れたといはれてゐる。今からすると、久丸様は世に呪はれた癩患者で或ひはそれ故、里人たちに姿を見られる事をいとつたのかも知れない。

久丸様は神戸で死んだ。神戸の寝祭りといつて舊正月巳の日から三日間行はれる久丸神社の例祭には全村一定の刻を限つて灯を消し、村人は總べて外出しない。久丸様への遠慮からだと思へられてゐる。

三本松のこのわめし

百七八十年前。渥美郡永澤村（福江町大字古田）に石の本の六造と呼ぶ百姓があつた。ある年の初秋、農業の閑を見て狩に出かけた。

山田山から大坂山、馬乞、龜山と山傳ひに歩き廻つた末石堂山の矢作の鼻まで来てその叢に怪しい物のうなり聲を聞いた。猪と見定め五匁玉を一發放つた。俄然、すさまじい鳴動起り車軸のやうな怪雨が襲つた。六造が魂も身に添はぬ態で逃げ歸つたのを迎へた妻が

「それは魔物に違ひない。留め矢はお撃ちなされたか」
 と不安の面差しで聞いた。六造は始めて心づき家の窓口から石堂山目がけて留め矢を放った。

その月から妻は身重となり、月満ちて玉のやうな女兒をあげた。子供のなかつた六造夫婦はそれを「おくす」と名づけ寵育した。おくすは十四五歳の頃から氣がふれて亂暴をした。夫婦はもてあまして彼女を一室へ監禁した。おくすは

「わらは成人なさば豊島ヶ池の野主となり人を呑まん」

なご、日夜それを口癖にした。

おくすが監禁室を破つて逃走したのは、彼女が十八の、ある暴風雨の夜だつた。翌朝村人たちは、豊島ヶ池の畔におくすの着物や櫛を發見して、三日ばかり池中を搜索したが死体はつひにあがらなかつた。

六造が石堂山でうつたのは豊島ヶ池の野主の大蛇だつた。その骨が發見されて湖畔龜山の豊島神社（村社）にまつられた。大蛇の恨みを六造の妻の腹に宿して生れたのがおくすだつた。

彼女は豊島ヶ池二代目の野主となつた。彼女は豊島ヶ池と野田村蘆ヶ池とに一年づゝすんでゐた。おくすのゐる年にはきつと蓮の花がさく。それから幾年かたつての事である。

福江町大字中山の八右衛門といふ百姓が西山へ飼馬の「白」をつれてゆき、逃がしたのでたづねてゐるとその馬が豊島ヶ池の畔にゐるのでほつとして馬の背へ股がつたところが、馬は忽ち地を離れて中空高くかけあがつた。彼が馬だと思つたのはおくすだつた。

「お許し下さい。毎年大晦日にはこはめしを差上げます」

哀願して辛うじて放された。八右衛門は毎年大晦日に豊島ヶ池の三本松へこはめしをたきにいづた。二代目の八右衛門からは洗米で我慢をして貰つた。福江町長澤、長澤寺の過去帳にもちやんと記されてゐる。

蓮峯妙雲信女

安永二巳五月九日

六造子

おくす

夏雲 信土

寶曆二年四月十六日

六造

生譽妙本信女

安永三年

おくす女

山 屋 岩

聖徳太子が御十歳の時である。即ち敏達天皇の十年辛丑二月、千島の夷三億八千有餘万の大軍をひきゐ、大和國譯語田の都に攻め上つた——三億八千万といふ数字はごに根據があるのかわからないが随分エライ事である。それから千島の軍勢とあるが、北海道の千島あたりに軍勢のあるべくも思はれないからこれは奥州の松島邊と見てよからう。松島には先住民の居住した趾が澤山

ある。土地のものも矢張夷の住んだ跡だといつてゐる（松島を千松島ともいふ）ともかく聖徳太子はこの大軍をお防ぎになつた。

夷は太子が只の皇子ではない。佛様の御化身であるからとても弓矢ではかてぬ——といふので大きな石を投げつけてそれを唯一の武器として攻めかけた。この石がまた滅法界もない大きなもので、——驚いてはいけない、太子は神通力をもつてこの石を打ち拂ひ給ふた。すると石は三つに破裂して三ヶ國に墜落した。

その一つは奥州、一つは播州の海岸におち、今もこゝを投石の浦と傳へてゐる。なほ一つの破片が三河におちこれを岩根の里と呼んだ。現今の渥美郡二川町巖窟山岩屋山が即ちこれだ。

それから百四十九年の後聖武天皇の御宇天平二年庚午、約千百年前行基菩薩が諸國を遍歴してこの岩根の里へより、太子のなげかへした岩の懸崖奇秀の形を賞翫してこ

れを靈窟であるといふ折紙をつけ一刀三禮して千手観音の尊像を一尺一寸の御丈にきざみあげ、一字の精舎を建立してこの聖像を窟の中腹に安置し、その岩のかたちが龜のうづくまるに似てゐるといふので龜見山大岩寺と名づけられた。

x

元祿七年徳川家康はこの若干の御朱印を贈つたが天を殘す全部を烏有に歸し數の俤を偲ぶことができない



觀世音に歸依して舊規に基き正十三年火災に遭遇して尊像多の僧侶四散し、つひに昔日くなつた。その後元和八月遠

江國藤ヶ谷より通山和尚といふ禪宗の大徳がきてさゝやかながら一閣を構へた。元祿三年に至つて備前の國主左近衛少將源綱政歸依してより淨財もでき面目もあらたまつて今日に及んでゐるといふ。

x

吉田大橋の架替工事を命せられた江戸下谷の橋大工藤左衛門が岩屋山の聖觀音の夢の告げにより豊川へ繩を渡して反り加減を試みて成功した。江戸へかへつて後お禮として「岩屋講」なるものを組織し淨財をもつて一丈二尺の濡佛を鑄造して奉納したのが現在巖上に安置されてゐる聖觀音の銅像であると傳へられて、當時これが出來上つたとき江戸八百八町を練り廻してお祭り騒ぎをやつたといふ。事實、今でも下谷邊には「岩屋講」の名稱が殘つてゐる。尙この附近には人見岩、熊坂岩、文覺剝取りなど、ふ面白い名稱と、それに絡はる傳説がある。

貝ルミ貝ノイ

渥美半島の名物、エロ貝で知られてゐる淡菜は伊良湖戀路ヶ濱一帶の表演下さかんとれる。此のふざけた珍貝も歴史をさぐればなかく古い。延期式(約一千年前)に三河國から庸調として奉つたといふ。西行法師は諸國行脚の途次

いらこへわたりけるに、わがいと申すはまぐりにあこやのむねと侍るなりそれをとりたるからをたかくつみ
わがいのからをつみおき
と詠つてゐる。柳田國男の

……里人海に潜ぎて淡菜
那に輸出するなり、此の
て虹の彩をおびたり。
に一人が獲る珠は十、四
いふは真かや……（明治



をきたるを見て「あこやとる
てたからのあとを見するなり」
「遊海島記」中にも見へてゐ
をとるを生業とす、乾して支
貝にも亦珠あり、色淡黒にし
一匁の價四五十錢、一季の間
五匁、粉碎して目の薬とすと
三十四年七月)

昔、さる高貴の男女がその戀故にみやこを追はれて此の半島へ逃れて來たが、矢張

り口卑しい人眼の關に隔てられて男は福江町大字古田の辨財ヶ濱に、女は戀路ヶ濱に
別れ住み、ひそかに文を通はしたりたまの逢瀬に遺瀨ない胸の炎をおし鎮めてゐるう
ち、二人とも不思議な病につかれ、互ひにその名を呼びながら悶へ死に死んでしまつ
た。

戀に死んだ男の一念凝つて男性そつくりのミル貝となり、女の熱心凝つてイノ貝と
化したと傳へられ、文使ひの通つた浦海岸を今でも玉章ヶ浦と稱んでゐる。

権現の森の 棘らしな

天正十年五月、安土に信長を訪問した家康が、暑い盛りの六月二日、京
へ入らうとして本能寺の變を知つた。

「正に起つて光秀を亡し信長のよしみに報ゆべきはわが任なれど、手兵
僅かにして此のまゝ京に入らばたちどころに自滅せん、天下亂るればわが
少勢をもつて國に逃るゝ事またあやふし」

と蒼皇微行して伊勢に出で、白子の浦から船に乗り、渥美郡福江町小中山西ノ濱へ上陸する。従者僅々五六名に過ぎなかつた。

此の頃半島の諸所に野武士がとまなく良民たちは常に生きた陸をわざ／＼此の半島の尖端にら飛び込んだやうなものであつた。主従をとりこめてしまつた。家は合はせて應戦、西の濱の野中をも野ばらに鎧の袖をとられて進命、名もない野武士のためにあたら一命を断たれやうとした。



蜂起して弱肉強食、戦禍のい心地もなかつた。家康主従が上撰んだ事は飢へた狼の檻へ自た野武士の一群は殺倒して忽ち康は敵の重圍に陥り、自ら刃を逃げ廻つたが衆寡敵せず、然か退の自由を失ひ、つひに絶体絶

好漢家康も流石に此の時は狼狽したらう、おそろく物凄しい形相に變つてゐたに違ひ

ない。彼は必死だつた。人間最期の念力をもつて天地神明の加護を祈つた。と、不思議、執拗に搦みついてゐた野ばらの棘がばら／＼と落ち散つたので、あやふく虎口を脱し、たゞ一人、野越へ山越へ居城岡崎へ歸るを得たといふ。

爾來、そこに繁茂する野ばらは毎年、ふくいくと美しい花を咲かせるけれど、この叢を探しても一莖として棘をつけるものはない。「権現の森の棘なしばら」といまいに云ひ傳へ、半島七不思議の一つとして好事家へ興味ある研究資料を提供してゐる。

狐らとお

南設楽郡長篠古城趾附近には「おとら狐」といふ狐の子孫があるといはれてゐる、このおとら狐がつくと、よく長篠合戦の話をし、左りの眼からしきりに目ヤニを出し左りの足がチンパになるといふ。今も古城趾にはお虎狐の祠と傳へられるものが祀つてゐる。

古老の話によると、お虎狐は長篠城鎮守稻荷のお使で、今の祠はその末社である

とか。天正三年の合戦後廢城と共に本社は他へ移され、末社だけ取り残されたが誰もこれを祀らなかつたので、お虎狐はさかんにこの邊を荒し廻つたといふ。お虎狐が片目、片足になつたのは天正三年五月の戦争最中に城の高塚に上つて城の焼けおちるのをちツと眺めてゐた時、流弾のためにその左の目をうち抜かれたといひ、長篠城大奥の評定を障子の蔭から盗み聞いてゐたとき城主の爲に斬られてチンバになつたとある

一説によると、お虎狐が長篠近郷を荒し廻つてゐるとき、同じ城の藏屋敷跡に林藤太夫高英（林藤助光政の裔）といふ日置流雪荷流の弓の指南をする者がゐた。非常の名家で、代々この家の門へは鳥さへ怖れてとまらなかつたさうだ。これを聞いたお虎狐は「なにをツ、しやら臭い、一つ試してやらう」といふので、鳥に化けて門にとまつた。その鳴聲を耳にした林藤太夫は、いさゝか誇りを傷つけられて怒氣を含み、弓をとつて障子の隙間から鶴引目の法で鳥を射た。確に手ごたへはあつたのだが、矢は

急所を外れてゐたと見へ鳥は狼狽して逃げ去つた。その時左の眼を損じたのだ、それから數日の後このできごとをお虎狐が人の口を籍りて彼に話したので藤太夫はなるほどうなづいたさうだ。藤太夫に射られてお虎狐の足がチンバになつたともいふ。

お虎狐の最も怖れてゐた敵は遠州秋葉山の裏山に祀つてある犬神様（俗に山住様）といふのであつた。もしお虎狐が人間に憑く（これはお虎狐とばかりは限られてゐないが）とこの犬神様を頼みにゆく。犬神様を迎へてくると妙にお虎狐は立退いてゆくさうだ。そのとき屋棟でお虎狐の悲しい啼聲がするさうだ、お虎狐は今から十六七年前に、信州川中島で、狩人のねらつてゐた鳥を横目で見てゐて、鳥にあたるべき弾丸が附近の岩にあたり、その弾丸が弾かれて、運悪く命中して生命を落とした。——とお虎狐の子孫の狐が人の口を借りて世間へ發表した。

白岩大龍王

利修仙人が鳳來寺のお山を開かれた頃、この山に棲む大蛇がしばしば姿を現して仙人を惱ました。仙人はこれを釋伏せて白岩山に立退かした、白岩山に逃れて來た大蛇は「白岩大龍王」と祀られて今日その一族が附近に棲んでゐるといふ。むかし、門谷の村の庚申堂にまだ二十路の尼さんがひとり淋しく住んでゐた、白百合の一輪を偲ばせるやうな清楚な彼女の姿に思ひを寄せる村の若者たちは一人や二人ではなかつた、愛着の心おさへがたく忍んで戀慕の情を訴へるものもあつたが道心堅固な尼さんのために皆一様にとき諭されてすごとくと歸つてくるのが例となつてゐた、いつとはなく「あれは村の難儀を救つてくれる菩薩の化身だ」と尼さんは村人たちから神様扱ひを受けるやうになつた。

それから間もなくの事、村の若者三九太といふのが大變な報告をもたらせた。「尼神様が美しい少年を引入れていちやついてゐた」といふのである。男は繪に見るやうな振袖姿の稚兒で、その振袖にあざみの花模様はなもようの浮出して見えた事や、取亂された膳部

のかたはらで薄化粧さへした尼さんがほんのり色をそめ得もいはれぬ微笑みをうかべながら、自分の膝枕ひざまくらでスヤ／＼眠つてゐる男の稚兒ちごまけに櫛をいれてゐた事までつけ加へ、村人たちの妬みねたみがましい好こがばさり／＼と淋しく散るその弱じやくしていつた。そして深まる秋ひにこの村から姿を隠してしま



美少年は白岩様の大蛇おほへびだつたさと恥かしさに突詰めた決心を止めしたが尼さんが村の亂暴者から外へもらした、め白岩様の怒りに觸れて死んだものだうたがと傳へられる。近年ではこの白岩様は大變靈驗あらたかだと崇められ立派な御堂を寄進するものもあつて參詣人が絶へない。

淵ヶ琵琶

鳳來寺鐵道榎原驛から南へ一丁のところに屏風のやうに峭立してゐる巖石の胸腹を繰抜いたトンネルがある。このトンネルの下を「琵琶淵」ととなへいたづらに石塊一つ投げるものもなければ、足を止めてその底知れぬ水の面を眺めるものもなかつた。いまは荒くれたそなたちに樹を拂はれ、僅に残る小さい雑木が溪谷をわたる微風にそよ／＼となびき千古の謎を秘めたこの魔の淵にも明るい陽の光りがのぞき込まうとしてゐる。むかし、そま稼ぎの宗七といふ若者がすんでゐた。ある嵐の過ぎた夜彼はこの淵へ鰻釣りに出かけ一匹の大うなぎを針にかけて家へ持ち帰り、晩の食膳をにぎはさうと鰻を俎の上に乗せた。そして肉は蒲焼にして舌鼓をうち、頭は取りはなしたまゝ、勝手に置いた。宗七がその夜寢床へ入つて間もなく恐ろしい家鳴り震動がした。

宗七が驚いて勝手に元へ来て見ると切りはなした鰻の頭が俄にむくむくとふくれ出しあたり眩ゆい光りを放ちながら、ぬら／＼と流しもとへすべり落ちた。あまりの恐ろ

しさに宗七はがた／＼ふるえながら、なほよく見てゐると、鰻の頭は凄まじい音響を残して琵琶淵の方へころげていつた。宗七は物に憑かれた人のやうに蒼ざめてそのあとからひかれていつた。鰻の頭は琵琶淵まで来てげら／＼と高く笑ふと、そのまゝぶんと淵の中へ沈んでしまつた。生きた心地もなく逃げかへつた宗七はその夜發熱して土用の丑の日の丑の刻に同じその琵琶淵へ身を投げて死んでしまつた。

×
以来胴もしつぽもない鰻の頭がこの琵琶淵の野主となり、とき／＼巖窟の間から大きな頭をだして人々をおびやかすやうになつた。そしてこの奇怪な彼の姿を目にしたものは必ず歸つてから熱に浮かされ大病みすると傳へられる。

榎原トンネルの工事中工夫があやまつてこの淵へ墜ち溺死したことがある。「うなぎの頭に崇られたのだ」と人々は噂した。琵琶淵の名稱はその河底の凸凹した形が丁度びわに似てゐるところから誰れいふともなしにつけた名前附近の子供たちもごんよ

りとした底知れぬこの魔の淵だけには決して河童を真似ない。そして鰻の頭を川に捨てる。と琵琶淵の野主となつて崇る——といひ、かたくいましめ合つてゐる。

名 號 池

南設楽郡長篠村。往昔、此の村のさる家に旅僧來つて一夜の旅宿を乞ふたので、老婆喜んで丁重にもてなした。翌朝、旅僧の出發に際し、老婆は懇願して名號を得やうとしたが旅僧が聞き流して去らうとするので、いと惜しき事に思つてあとを慕ひ、川を隔て、つひに追ひつき白布を示して重ねて頼むと件の僧は懷中から筆墨をとりだし空中に六字の名號を書き流した、不思議、老婆の手にする布に「南無阿彌陀佛」の六字が鮮やかに映し出されたので老婆は驚きおそれ「何方にておはしますぞ」と問ふ、旅僧にツこと微笑み「空海ちや」とたゞ一言。さう傳へられてゐる。川のうちに高さ二間平面の岩あり、恰も文字の如き龜裂がある。一説には大師の書きたまふた文字が此の岩に移り、永く残つたともある。周圍に岩が

立てこめ、うちに流れのない淀みがあるので、これを「名號ヶ池」と呼んでゐる。

三 橋 の 淵

南設楽狭川の三橋（猿橋）の淵には龍宮があるといひ傳へてゐる。むかし瀧川村に惣兵衛といふ白木商の大元締があつた、ある晩秋の事惣兵衛が御用材を段戸山から人足にきりださせ、大切な木材であるからとて、材木のいたまぬやうその先きに鐵輪をはめさせて運搬した。材木を流して二の瀧（發電所の水をせきとめたところ）まで來たとき、人足が金輪を水中に落とした……と同時に材木がすっかり煙のやうに消えてしまつたので、人足共は水神様の怒りに觸れたのであらうといつて恐怖れた。水神様といふのは二の瀧附近にあるきれいな丸い石で、あるとき川狩の人が邪魔だといつて淵へ落したところ翌日これがちやんと元の岩の上にかへつてゐたといひ、自來人々から尊まれてゐた。

x

三橋の淵はそこから半町ばかり下流の鶴の首といふところであり、底が知れぬといはれてゐる、その淵に材木があらうと人足たちは噂した。惣兵衛はその在否を見とゞけるといつて家重代の刀を口にくわへ三橋の淵へ身を躍らせ、だんだんもぐつてゆくと、深い／＼水底に



失つた材木が澤山つま
主である水神様に談判
後この淵へ鐵を沈めぬ
部一鍛田（八名郡八名
うかべてやるといつた

ので話がまとまり惣兵衛は水底の龍宮から歸つて來た。ところが惣兵衛の一日と思つたのがこの世では三年も経過してゐて、母親がこの間に伊勢詣りを三度もやつてゐたといふ。

材木は約束の通り一鍛田のカイクラ淵へ浮んださうだ。その後惣兵衛はお禮のため

ふた／＼び淵へ潜つていつた。その時水神様は「よく來てくれた」といろ／＼もてなし歸るときに不思議な頭布をくれた、これをかぶると鳥が何を鳴いてゐるかゝわかつたといふ。又淵の主は惣兵衛の家に限り望みの用事を書いて三橋の淵に沈めると翌日なんでも聞き届てくれた。ある年田植で多勢の人を頼み食器が不足したので三橋の淵より二十人前の膳碗を借用した。それを返済するときオカサの縁を欠いたまゝ黙つて沈めたのでその後願ひは叶はなくなつてしまつた。

浄瑠璃姫

南設長篠村笹谷の溪流の傍らに苔むした石祠が二基並んでゐる。一つを浄瑠璃御前の祠といひ、小さい方を侍女の祠と呼んでゐる。浄瑠璃御前は矢作の長者兼高の娘で鳳來寺峰薬師のもうし子だといふ。源義経が金賣の吉次と奥州に落ちゆくその途次、兼高の家へ泊つた。月の夜だつた。美妙な琴の音色に旅情を慰められた義経が母から貰つた青葉の笛で音を合はせた。姫が十五の春

である。

さうしたかりそめの事から御曹子義經君と枕をかはし、又會ふ日を約したが、奥州へ落ちのびた義經からは何のたよりもなかつた。姫は月日の過ぎゆくと共に世を味けなく思ひ戀の痛手を胸にひめて鳳來寺のふもと笹ヶ谷に柴の庵を結び侍女冷泉と共に尼となつて落穂をひろつたり根せりをつんだり、さびしい餘生を果したといふ。今も笹谷に御前の庵跡といふところや芹摘場といふ地名などが残つて居る。又一説によると淨瑠璃御前は一の瀧へ沈んでその野主となり、龍宮へ通つてゐたといふ。附近に太郎兵といふ百姓あり、あやまつてこの瀧へおちたが、龍宮へ至り、乙姫様になつてゐる淨瑠璃御前に面接して來たと傳へられてゐる。

脚の鶴

南設樂郡鳳來寺山麓に周昌院といふ禪寺がある。彼の新田義貞が後醍醐帝より賜つたといふ句當内侍。その句當内侍は尼となつて都を逃れこの寺に世

を忍び余生を佛に仕へたと傳へられてゐる。彼女即ち覺庵尼筆になる大般若經六百卷は火災に遭つて焼失したが、都から携へて來た鶴の脚は今もなほ同寺に残つてゐるといふ。

酒菊・蒲菖・桃

天正十三年甲斐の武田、三河の徳川兩氏が東海の覇を一舉に決した古戰場長篠驛から豊川板敷川の清流をのぼること六里、老樹の繁みに包まれた周圍五丁ばかりの池畔に神寂びた小祠がある。

これは信州諏訪大明神を分請した同所の氏神で毎年七月の祭典に神遷の式が行はれ村の若者の間に桃酒、菖蒲酒、菊酒の故事が繰返されてゐる。社のある池を池場といつて元北設樂郡役所を去る南へ八里、月山の麓三輪村に屬する僻村で神秘をつゝむ一つの池がある。

いつの頃か古老の話だから詳かでないが、祠の傍らなるこの池を龍ヶ池と呼び信

州諏訪湖から明神の御供をして来た母子の龍が野主となつて棲んでゐた。母親は汚れ多い人間の目に觸れる事を恐れ、常に子龍をいまして、龍宮へ通ふといふ池の底に深く身を潜めてゐた。ある年の夏祭りの事であつた。祠には宵からゴマを焚いて神樂を奏し、池の面では村の若衆や乙女達が小舟を浮べて笛、太鼓の囃子面白く夜の更けるさへ知らぬ有様だつた。村長も一際目立つ器量よしだつた。や乙女たちが三々五々つれ立つそかに尾行する臍たけた若者が五月はうツとりと美しい若者を見た。若者は明けの鐘に驚いて又の日を約して立去つた。かうした事が幾夜となく繰返された、ある夜五月は男の身体の夜毎冷めたく感ぜられるを訝かり、若者の素性をたづねたが、若者はかたく口を閉ぢて答へなかつた。



x

既に若者の愛を腹に宿してゐた五月は、彼の素性を知りたい一念から、田の畦、藪の中を抜けて男のあとをつけていつた。若者の姿は、神あれを怖れて夏祭の宵の外一人の村人たちも訪れた事のないあの龍ヶ池の畔で消へたのだ。怖しさと悲しさに、我を忘れて家へ逃げかへつた、その五月は程なく盃三杯もある龍の子を生み落とし苦しさに喘ぎながら龍の化身の若者に教へられた桃酒、菖蒲酒、菊酒を母親にせがんで飲み産後の苦しみを辛ふじて免れた。母親は五月の生んだ龍の子へ縫針千本を添へて龍ヶ池へ投げ込んだので、水底で母子の龍は居堪たまらず悶へ苦しみながら信州の諏訪湖へ逃げかへつてしまつた。桃酒、菖蒲酒、菊酒の行事はそれから始まつたと傳へられ、娘五月の家は現在池場なる金田治平氏邸にあつたといはれてゐる。

山割獲

戸田加賀守の名倉城時代。肌冷めたく風の沁むある秋の事であつた。戦亂に追はれた主従か、乃至は不義の駆落者か、由緒ありげな上臍と、供には

相應しい眉目秀麗な中間態の若者、憚り勝に立寄つたのが、戸田家の家老鍛塚市兵衛の屋敷であつた。「自分らは人知れず他國へ渡る者であるが、足助へ出る道をお教へ願ひたい」と頼んだので、市兵衛も同情して、名倉村清水から大タガへ出る樽峠越の間道を二人に教へた。

「何者が參つても決
他言下さりませぬや
を押して立去つた。
士が駆けつけて來た
の約束を守つて云は



女は厚く禮を述べ
して私らの事は御
う」繰返し／＼念
間もなく追手の武
最初市兵衛は女と
なかつたが見せつ

けられた黄金に眼が眩んで、つひ二人の間道越を教へてしまつた。

追手の武士は時を移さず後を追ひ、二人を捕へると、先づ若者を斬り殺し、二人が携へてゐた壘を割つて小判を奪ひ、女を市兵衛の屋敷へ引ッ立てると、何を目的の折

檻か、責め苛んだ揚句、庭へ引き出し、片足を牛に、片足を馬に縛りつけ、一時に左
右へ鞭をあたへたので、上臈は身体を二つに引裂かれ見るも無慘な最期を遂げた。さ
うして責め殺された二人の怨靈が祟つたのか、怨のために誓ひを破つた市兵衛は日な
らずして狂ひ死に、鍛塚家にはその後代々跛や片目の子が出来たといふ。爾來、この
附近では瓜の類は決して作らない。若しこれを切り割れば生血が出ると云ひ傳へ、中
間の靈を祀つたといふ塚も現存してゐるし、壘割山の呼稱も残つてゐる。

淵へがらく

北設樂郡名倉村大字名倉。縣道編入線田口足助線に添ひ、現田口發電所の少
し下流に當るところ。昔、大名倉村の博勞某が田口へ所用の歸途、此の淵ま
でくると、馬の鞍が荷をつけたまゝ、ひつくり返つて、何度つけ直しても駄
目なので困つてゐると美しい女が現はれ「妾がつけて進ませせう」といつて
馬を川の方へヒツぱつてゆく。どうも様子がおかしい。此の淵に河童が棲む

といふ事を聞いてゐたので、さてはと思ひ、懐中の針（馬の療治に使用するもの）を取り出し、後から女の背へあてると、忽ち美女は一塊の黒い塊りとなつて水中に消へたといふ。「鞍がへり」をつゞめてクラガへ淵と呼ぶやうになつた。よく似た話が郡内振草川のこはせ淵にもある。設樂の新屋といふ家で、厩から馬をひき出さうとしたがどうしても出ない。よく見ると河小僧が馬の尻尾にぶら下つてゐる。つゝも（糸つぎに使用する火箸に似た鐵の棒）をもつて来て見せると、河童は狼狽へて逃げ去つたといふ。此の河童はすべて金物を嫌ふといはれてゐる。

黒川のそが、わ地内の「御池様」といふ淵にも河童が棲んでゐて、たとへ一本でも木綿針を落すと淵中が眞紅に染ると傳へられてゐる。

津具金山

甲斐の武田信玄が天正元年三方ヶ原から長篠に出づる途中、野田城を攻め落さうとした。

月明の夜、たま／＼城中に笛聲嘹亮として流れ来る。陣廻りをしてゐた信玄が馬を丘に止め、恍惚としてゐるとき不意に城内から狙撃された——これは既に甲陽軍談、三河物語、日本外史などに於いてお馴染み深い物語である。

傷ついた信玄は已むなく包圍を解き新城、長篠を経て設樂の津具村に野營した。その夜、黄金色の衣服をつけた怪しきものが夢枕に立ち「われ此の山に埋れる黄金の精なるが、出だして使命を遂げしめよ」と乞ふたので、不思議に思ひ明けるを待つて家來に命じ探掘させて見るとなるほど出た。甲州へもちかへり甲金以上の良質である事を認めたと傳へられてゐるが、惜しいかな信玄逝いて幾百星霜、その志を繼ぐもの出でず、上津具下津具にまたがる大金脈も空しく地下に眠つてゐた。まさか夢の告でもあるまいがそこへ眼をつけたのが、東三事業界の立物倉田藤四郎氏だ。同氏によつて

目下盛んに採掘中の津具金山がそれである。

お菊大明神

川合驛から池場へ通じる別所街道の所謂、池場坂を登りかけた道の上に一基の墓がある、人呼んで「お菊の墓」といふ。いつの頃か年若く美しい女性が此のあたりにさゝやかな庵を結び、噂高い村の若者たちの獵奇心を唆つたが口を交はしたものもない。その前身はもとより、生國さへもわからない。淋しく、風のやうに來て、いつも庵のうちに閉ぢ籠り、ぼんやりと時には遣瀨なげな重い吐息に涙さへ浮べてゐる。何の苦惱か、憂悶の麗人は噂を他に木の葉散る秋の半ば、底知れずと云はれる龜淵に身を投げて死んでしまつた。

「川合龜崎霧雨降らばお菊涙とおぼし召せ」

美しく匂やかな彼女の姿を菊にたとへて唄つたのだらう。梢を渡る小鳥たちは「お菊二十四、お菊二十四」と啼くと傳へられ、お菊を祀つた小祠もあつてお菊大明神と

記した小帳が何本も立つてゐる。同じ此の龜淵に別の話がある。川合に山犬の口を引裂いたといふ忠右衛門とい
姥塚附近を通ると提灯を
妖怪に逢ひないと思ひ煙草
禿子の眉間を殴りつける
氣を失つてしまつた。禿ッ
あつたと傳へられてゐる。
を結び、淵へ落とし深さを測らうとして野主のためにひき込まれたといふ。



ふ剛氣な男があた。ある夜、もつた禿ッ子がついてくる。の火に事よせいきなり煙管でど火花が散つてそのまゝ、彼は子は龜淵に棲む野主の變化でその後、村人の一人が繩へ鉈

穴瀧大明神

田峰の北に聳える笹の頭山の細く静かな溪谷。裾を呼間川へ浸してゐる此の岩間の清流をさかのぼる源に穴瀧がある、岩上から湧出落下する小瀧だが、瀧裏に底知れずの岩窟があり、然かも東方六町の呼間川大瀧の瀧

壺へ岩じ大蛇がすむと云ひ傳へてゐる。俗に穴瀧明神と稱へ雨乞の祈願に靈驗あらたかだといふのでひでりが續くと近郷の人々が鉦太鼓笛で賑やかに登山する。瀧の附近に昔、十抱へ以上もある樺の大木があつて大蛇が巢喰つてゐたといふ。村の一人がこれを伐出して大儲けをしようとした事がある。ところが鋸でひきにかつた最初の日、どこから現はれたか美しい女が悲しさうにぼんやり立つてゐる。不審を懐きながらその日は歸り、翌朝再びいつて仕事にかゝると、いつの間にか昨日の女が來てゐる。そして矢張り離れずに終日ぼんやりと眺めてゐる。つひに見かけた事のない女だ、殊に、昨日の今日ではあるし、場所柄だけに村の男はぎよツとした。云ひやうのない戦慄を覺へて、鋸をすけると一目散、夢中で家へ逃げ歸ると、その夜から發熱して三日目に死んでしまつた。爾來樺の附近へは誰一人近よらぬやうになつたといふ。今でも此の樺の形骸は残つてゐる。穴瀧の岩窟を探らうとして足をいれたものもあるが、二間より奥へ入つたものはなく、不思議な物音を聞いたり得体の知れぬ怪物に出會つたり、みな途中から蒼くなつて引ッ返へしてしまふさうな。

東三河の傳説物語 (完)

昭和九年九月十日印刷
昭和九年九月十五日發行

著者檢印



定價 五拾錢

著者 豊橋市東田町西郷七一
 發行人 乙部 静夫
 印刷人 豊橋市花田町黒福六〇ノ五
 佐藤 卓司
 印刷所 豊橋市大手通り中榮電停前
 佐藤 印刷所
 電話三二二三番

發行所 豊橋市東田町西郷七一 『東三河の傳説』刊行會

品分部・車轉自

アトスンエチ・イケ・イケ

原荻の橋豊

小池町販賣部

廣小路販賣部
電話四五七七番

札木町販賣部
電話二〇六九番

旭町販賣部

真寫

新美三光堂

豐橋市中八町
電話五五七〇番

印刷

電話二二三三八番

豊橋市東田坂巧
精美印刷

旅館

角

上

館

渥美郡福江町
電話一三五番

井筒萬旅館

渥美郡福江町
電話一九・二〇番

半高 島級 遊バ 覽ス 豊橋 福江 間

會商車動自出之日

豐橋前 (電話二三八四番)
田原町 (電話二六〇番)
福江町 (電話二〇八番) 營業所

妙にきよい薬

淋病にはマルキの淋滅
ねつとり、頭痛、齒の痛みに
マルキのアイソ

豊橋市中世古町大通

マルキ薬局

薬剤師 加藤審治
電話四四三七番

おぼきもの

足袋の店

豊橋市花園町

牧野ハキモノ店

電話三五二二番

映畫常設館

帝國館 花田館
豊橋市上傳馬
電二二二五番
豊橋市花田町
電二六四六番

パキワネ一マ 松竹館
豊橋市松葉町
電四二六一番
豊橋市神明町
電三六七七番

有樂館 錦館
豊橋市西八町
電二五二九番
豊橋市廣小路
電四六五二番

劇場

東雲座
豊橋市吳服町(電二二三三番)

豊橋劇場
豊橋市石塚町(電二七四一番)

御油海岸

代表旅館

引馬野
驛前電一九番

月見亭
驛前電一三番

多美屋
驛前電一六番

水月
驛前電三四番

御料理 東玉壽司店
驛前電一一番

酒類

目丸屋酒店
豊橋市西八町
電話五二一九番

酒類

大野屋酒店
豊橋市板新道
電話二九五八番

御料理
御旅館

増田屋

豊橋市小池町
電話五二三八番

酒場 美人群象

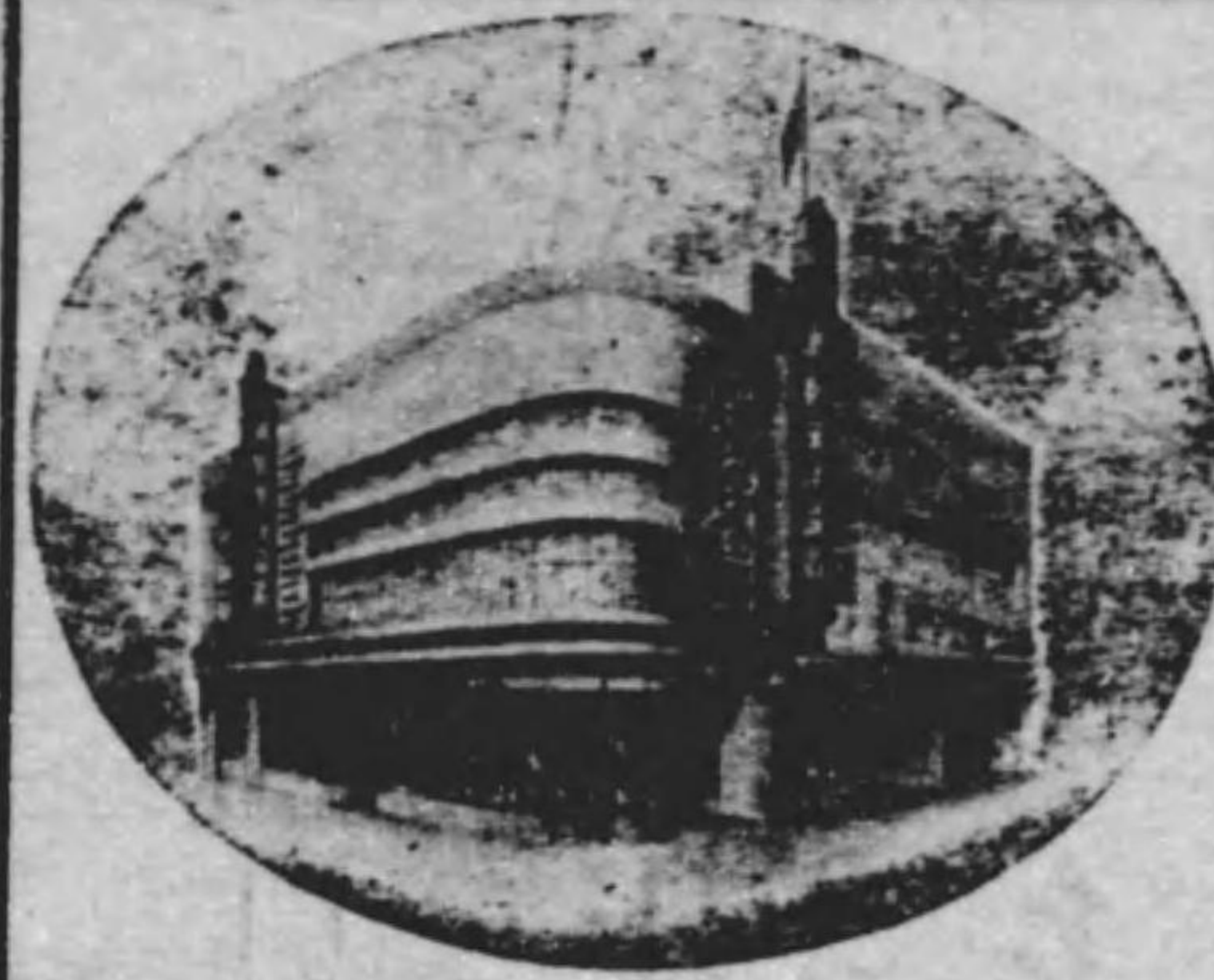
ミス・上海

豊橋

酒場

ハルナ

豊橋



洋物百貨

浦柴屋

豊橋市廣小路
電話五二七八

井ツヘイ醬油
吉八ッ橋納豆

豊橋市船町
醸造元 井ツヘイ醬油合資會社

電話二三一四番

産名橋豊

輪竹の守

豊橋市
魚町

佐藤善作商店

電話二四三五番

現代流行品。商品豊富。

小間物と
化粧品は

内藤小間物店

賣店 新川公設市場
同 東田公認市場
同 船町ハザ

御料理會
御宴會
香水風呂

八

千

久

豐橋市上市傳馬町
電話三七九二
番五五四二

御料理

老松館

豐橋木テ儿

豐橋市關屋河畔
電話二一一二番

營業御案内

是非御利用相成度候

有價證券擔保貸付
日掛貨付
不動產擔保貸付
商業手形割引
公債株式現物賣買業
火災保險
生命保險
保險代辦業

資本金拾五万圓

榮商事株式會社

豐橋市吳服町二一番地

電話 三六二九番
四四七九番

豐橋電氣軌道株式會社

中部電力豐橋營業所

豐橋組合銀行

豐橋將棋俱樂部

稻垣九十九

豐橋市天王町

豐川鐵道株式會社

鳳來寺鐵道株式會社

田口鐵道株式會社

津具金山株式會社

